

研究紀要

第36号

古墳時代前期における方形周溝墓の造営単位と群構成
—中耕・広面遺跡の検討—

福田 聖

埼玉県における古墳時代の祭祀遺跡
—調査と研究のあゆみ—

大谷 徹

埼玉県北部の四面廂建物

田中広明

防災建築物「水塚」の考古学的研究
—加須市本田遺跡の発掘調査—

青木 弘

2022

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

古墳時代前期における方形周溝墓の造営単位と群構成 福田 聖 (1)
—中耕・広面遺跡の検討—

埼玉県における古墳時代の祭祀遺跡 大谷 徹 (47)
—調査と研究のあゆみ—

埼玉県北部の四面廻建物 田中広明 (67)

防災建築物「水塚」の考古学的研究 青木 弘 (89)
—加須市本田遺跡の発掘調査—

古墳時代前期における方形周溝墓の造営単位と群構成 —中耕・広面遺跡の検討—

福田 聖

要旨 埼玉県坂戸市中耕・広面遺跡は、関東地方における古墳時代前期の大規模方形周溝墓群で、ほぼ全域が調査されている貴重な事例である。報告書やその後の研究では3時期の墓域の展開が明らかにされているが、本稿では、各時期の間に更に一時期を加え、造営単位や群形成過程について更に詳細に検討を行った。その結果、造営単位は規模、平面形にかかわらずほぼ同世代と考えられる2基を基本とし、始祖墓を常に意識した群形成が明らかになった。弥生時代以来の血縁関係による出自集団をもとにした造営が大原則であったものと考えられる。展開期である3期には規模の格差が見られるようになるが、流動的であるため、階層的なポジションも世襲されないものと考えられる。群内には古墳時代新たに導入された、全周型の平面形や版築状盛土、焼成前穿孔壺といった新しい要素を持つ周溝墓があり、階層との関係もあるが、「外来系周溝墓」として改めて評価した。墓地の造営過程で「墓道」や「広場」が形成されるが最終段階で、その箇所に造墓されて墓域形成が終焉するのが明らかになった。弥生時代以来の造墓規則が古墳時代前期でも守られるとともに、外来系要素の導入、「墓道」「広場」の形成と役割について、新しい知見が得られた。

1 はじめに

方形周溝墓は誰によって造られ、誰が埋葬されているのか。残念ながら誰にも答えられない。

この根本的な問題は、どうすれば解決できるのであろうか。

弥生時代から古墳時代前期にかけての墓制である方形周溝墓は、当初古墳につながる墓制としての理論的要請から、夫婦を単位とした家族による小經營の共同体が造営主体であると考えられてきた。しかし、歯冠分析法による人骨分析をもとに、田中良之が古墳の造営は血縁関係にある同一世代により行われているとした所謂「キョウダイ原理」の提唱を受け、方形周溝墓の被葬者像、造営も「キョウダイ原理」に基づくとする研究が進められるようになってきた。その経緯については別稿（福田2021）に詳述したため、そちらを参

照願いたい。

さて、そうした研究動向の中で、では、どのような検討が必要であろうか。報告書では、その遺跡についての検討が早くされているのは言うまでもない。それを前提にしながら、上述のような視点から、造営単位はどのようなものか。造営単位の積み重ねとしての群は実際にどのように形成されるのかを、まず明らかにする必要があるだろう。その上で、その単位と群構成の歴史的評価、意味の検討が可能になるものと考えられる。

しかし、かつて述べたように方形周溝墓は造営、遺物の属性が多く（福田1996）、一つの群の規模も大きいため、帰納的で仔細な検討には多くの時間と手間が必要であり、一足飛びに結論に至るのは困難である。しかし、やはります遺跡単位での検討を行い、そこから得られた検討結果を展望と

して、他の遺跡の検討結果と比較検討を行うのが、最も地味だが、最速の方法なのではないだろうか。

関東地方だけで約6000基の方形周溝墓が調査されているが、墓地全体を調査した例は数少ない。本稿では、その中の一つで、筆者も調査担当者の一人であった埼玉県坂戸市入西遺跡群の中耕、広面遺跡について取り上げる。

2 入西遺跡群の概要

立地 中耕・広面の両遺跡は、更にその西側にある稲荷前遺跡とともに、越辺川右岸、毛呂台地東端の低台地上に造られている(第1図)。現状では越辺川の氾濫原の中にあらが、稲荷前遺跡が一段高く、中耕・広面遺跡とは4mほどの比高差がある。遺跡周辺は古い段階から開発が及んでおり、全体が入西条里遺跡の中にある。調査前は水田で、調査は夥しい湧水に悩まされた。

そのため2遺跡とも、周辺が越辺川の氾濫によって形成された低い間に囲まれている。結果として、独立した島状の微高地となり、遺跡の範囲が瞭然となっている。なお、広面遺跡の報告者村田健二は、南西端の2基は、桑原A遺跡の微高地にあるもので、本来広面遺跡の範囲とはできないが、桑原A遺跡には同時期の遺構がないため、広面遺跡からの一連のものとして報告している。

報告書では、水田耕作土、旧表土の下の再堆積のシルトロームが最大幅120m、長さ300m、広面、桑原A遺跡までを含めると長さ550mに及び平坦な広がりを見せる報告している。中耕と広面の間は、幅50mほどの深い谷になっており、中耕が長さ300m、広面が長さ200mの大きな2か所の島状の微高地になっている。

中耕遺跡 中耕からは、弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴建物跡72軒、掘立柱建物跡7棟、方形周溝墓68基、溝跡3条、土壙31基、性格不明遺構2基が検出されている。後述するが、当初は集落で、その終末期に墓地が開かれ、最終的

には墓地となって廃絶する。

広面遺跡 広面遺跡からは、古墳時代前期の方形周溝墓22基のみが検出されている。他は近世の遺構のみで、方形周溝墓のみの墓地であったと考えられる。

3 中耕・広面遺跡についてこれまでの研究

3-1 杉崎茂樹による報告と検討

中耕遺跡の報告者の杉崎茂樹は、出土遺物をもとにIからIV期の時期区分、周溝墓間の大きな空隙地をもとにIからⅢの群設定を行い、墓域の展開を明らかにしている。更に石坂俊郎は杉崎の検討に基づき、広面遺跡も合わせて詳細に展開をトレースしている(杉崎1993石坂第2図)。

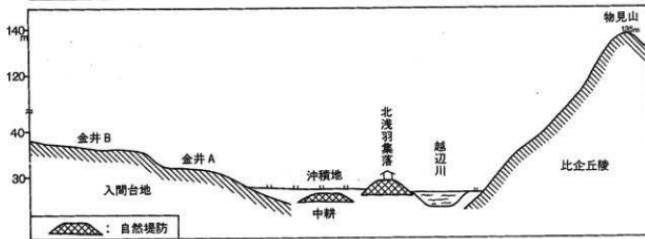
杉崎は先行する集落域をI・II期としているが、II期に墓域が形成された段階では、集落と墓域が併存する状態であった。杉崎は集落域の土器をIIa、墓域の土器をIIbとしている。更に継続する墓域となってからの土器群をIII・IV期に二分した。

墓域の展開については、以下のようにまとめている。IIb期:各群で四隅切れの起点墓の造営が始まる。III期:四隅切れから全周型への転換が起こる。IV期:全周型となり、「前方後方型」が見られる(SR6・42)。III期までの空隙地、外周、周辺に墓域が展開し、墓域が完成する(同pp.304-306)。

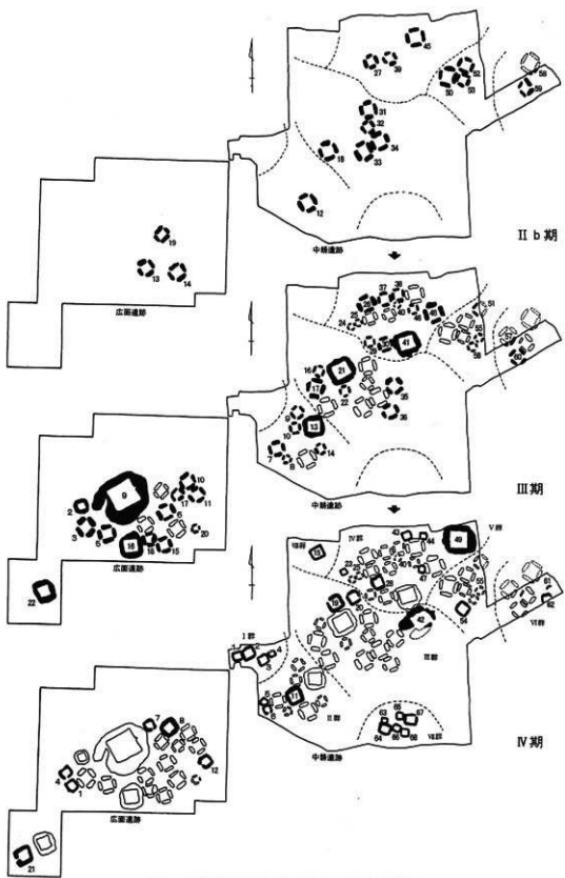
この変遷をもとに、被葬者の性格について杉崎は、まず「四隅切れ系の周溝墓の被葬者」を「集団内の家長的な存在」とする。そこから「中耕遺跡の周溝墓群の造営に係わった集団の首長」である大型の前方後方墓であるSR42の出現に至り、「村落を統括する立場の人物が析出した」と推定している(同pp.312)。

3-2 石坂俊郎による研究

石坂俊郎は「中耕・広面遺跡墳墓群と供獻土器」(1)・(2)(石坂2008・2009、以下石坂(1)(2)



第1図 中耕・広面遺跡周辺の地形（中耕報告書より転載）



第2図 中耕・広面遺跡方形周溝墓時期変遷図（杉崎1993をもとに石坂が作成、石坂2008より転載）

と表記)で、中耕・広面の両遺跡について本格的な検討を加えた。意外だが、一遺跡の方形周溝墓群について詳細な検討を加えた論考は少ない。それは、方形周溝墓は遺構としての属性が多く、検討に多くの労力を要するためとも思われる。しかも一遺跡の検討から大きな成果が得られるとは限らない。その点からも、石坂の試みには敬意を表したい。

石坂(1)では、遺構の分類から始まり、方形周溝墓群の動態を整理し、出土土器の分類とそれを法量により更に分け、遺構の規模との関連付けを行っている。

石坂(2)では、出土土器の器種構成と出土土器量を整理し、更に出土位置との対応、平面形・規模との対応を追求した。

ここでは、本稿に闇連する遺構についての検討を中心に見ていく。

まず形態分類については、数基を除いて方台部の盛土が失われているため、平面形をもとに、A「四隅切れ」、B「全周」、C「一隅切れ」、D「一辺中央切れ」、E「前方後方」に分けています。この形態分類を方台部の規模と対比し、更に杉崎が分けた8墓群、II b期からIV期の3時期区分をもとに、その消長を整理した。第3図はそれをまとめたもので、各群における平面形、規模の様相がみごとに現われている。

石坂は、この手続きをもとに、各時期の平面形、規模について次のようにまとめる(石坂(1)pp.7-8より抜粋・引用)。

中耕遺跡

II b期 「中型A形墳期」。80m²を境に大小がある。II～IV群で起点墓が造られ、以降造墓が継続する。

III期 「中・小型A形墳と大型B形墳の時期」。A形墳主体。規模はやや小型化、100～250m²のB形墳が出現。

II～IV群では造営基數が増え、A形主体だが各群にB形が一基ずつ出現する。このB形は各群中で規模が最大で、一基のみしか見られない。V～VI群は造営基數が横ばいで、B形は造れない。

IV期 中・小型B形墳と突出大型墳で構成。A形墳は見られなくなり、B形主体となる。A形墳の規模をB形墳が引き継ぐ。C・D形が少数見られる。墳形・規模が突出するものが見られる一方で、小型のI・VII・VIII群が出現し、群総体としての分布域は拡大する。突出大型墳とI・VII・VIII群の小型墳は、IV期の造営としては大きな空白の中間域を挟み、隔絶が強調される。SR42・49は、III期までの小単位との関連が見えず、各々の小単位へ帰属させる根拠が薄弱である。また、新たな小型のI・VII・VIII群の出現は、それまでの小単位群の枠を超えた群構成再編の結果と推定する。

広面遺跡

III期におけるSZ9の出現により、中耕IV期の状況が先行して、中耕III期と複合して現れる。

以上の石坂による様相のとりまとめについては、本稿の検討においても大きな齟齬は見られず、妥当と考えられる。

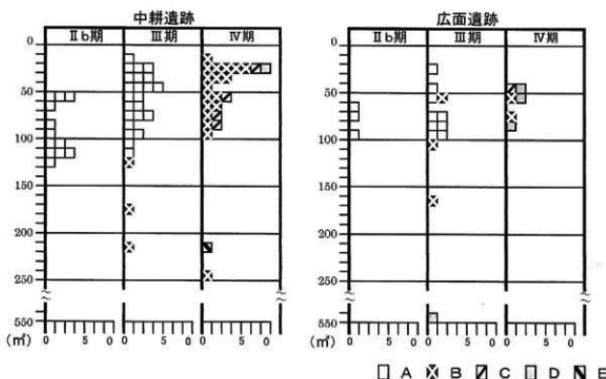
氏は更に、この遺構の検討をもとに、出土遺物の分類、変遷、土器の出土状況について論を進める。

出土遺物の詳細な氏の分析については、本稿では扱えないため、機会を改めたい。

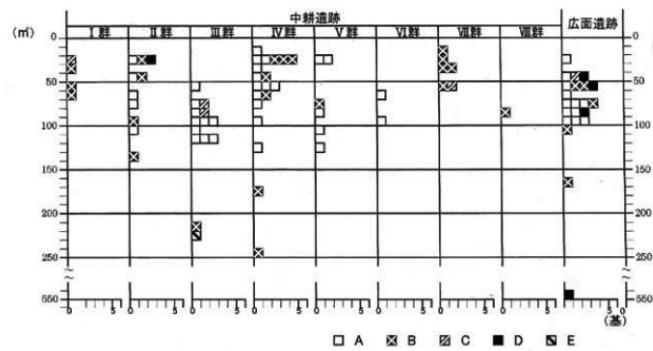
ここでは、造営単位、群構成の把握に、有効な情報である出土状況の分析について見ておきたい(石坂2009pp.71、第4図)。

氏は、まず出土状況や出土量が、A、B型のいずれにおいても、様々であると指摘する。その上で、出土位置の南側への偏りを、「祭祀の中心位置」、「墳墓の正面観」を窺わせるものとする。「陸

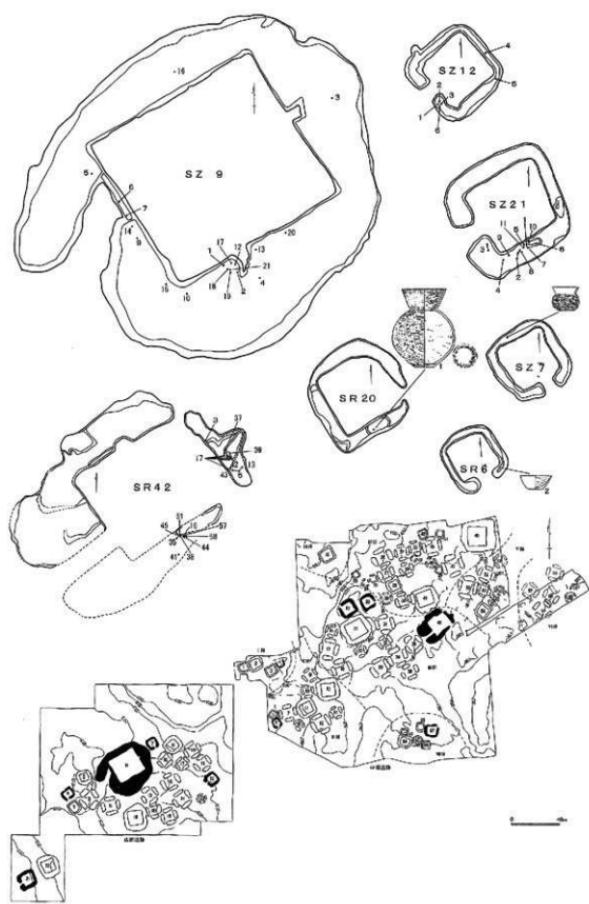
時期毎の形態・規模分布



群ごとの形態・規模分布



第3図 石坂による時期・規模分布図（石坂 2008・2009 より転載）



第4図 全周・中央陸橋型方形周溝墓の土器出土状況（石坂2009より転載）

橋直下の集中出土も、そこが方台部出入り口、墳墓周囲の主たる場」と推定する。合わせて「陸橋部付近と南溝の意識はD型墳でも認められ、そこに墳墓祭祀として発達した壇Eが配置される状況は、主たる場として重複されたことを示している。」として、南側が「主たる場」として共通して意識されたとしている(第4図)。

確かに石坂が言うように、土器配置からは、南側から各々の墓群に至る可能性が高いと考えられる。しかし、方位のみでは全体の説明が難しいのも確かである。

大きな意味で南側を正面とする意識を認めつつ、これから検討によって明らかになったように、造営行為が累積することによって、南側を中心とした通路や各墓群への通行が規制化され、方向性が顕在化していくと考えられるからである。石坂が、節の最後に述べた「このような個々の状況が群内で集積されれば、墓道の推定、小単位群の把握等、墳墓群の有機的な構造を復元する有効な手かりとなるだろう。」との展望こそが、本稿がこれから行おうとする作業そのものである。

3-3 本稿における検討方法

以上の両氏の検討を踏まえて、本稿における検討方法を提示したい。

冒頭に述べたように、本稿の目的は、方形周溝墓の造営単位はどのようなものか。また、造営単位の積み重ねとしての群は実際にどのように形成されるのかを明らかにすることにある。

まず、造営単位については、各群の中で、軸方向、陸橋部の開口方向、周溝の連接、変形などの近接度合い、土器配置、出土土器の時期によって把握する。

調査に基づいた報告における杉崎の所見は詳細であり、適宜参照したい。

次に、この造営単位を踏まえて、群の形成過程を明らかにする。

群分類については、基本的に両氏の案を前提としたが、当時の造営行為では周溝の近接度と軸方向は重要な基準と考えられるため、一部に変更を加えている。また、群の呼称も説明の便宜のため変更した。

広面遺跡については、既に拙稿(福田2008)で、土器配置のみによって形成過程を描いたが、それのみでは不充分なのは、石坂の検討を見ても明らかである。

杉崎・石坂が示したように、2期には中耕遺跡の集落が存続しており、基本的に住居跡がない箇所から造営が始まる。墓域の本格的な展開は3期であり、4期に収束する。墓域の形成は、両氏がまとめられたとおりである。土器編年、既存の周溝墓を避けて築造された個々の様相からまとめられた墓域の形成過程は、概ね首肯できる。

しかし、残念ながら、時期区分に重点を置いた展開を想定したために、一見ほとんど規則性を持たない結果となってしまっている(第2図)。

時期区分は、あくまで現在の我々が設定したもので、本来墓域の展開はそれに規定されるものではない。そのため各時期に跨るような、あるいは時期分けが微妙な造営単位や群の形成が隠れてしまっているのである。

本稿では、中耕・広面両遺跡について、土器配置と合わせて更に周溝の連接、重複や、先行する周溝墓を避けることによる周溝の変形等の近接度合い、群の展開の方向性、出土土器の時期的な位置づけを加味して、時期を跨ぐ群の形成過程を加えて整理する。

杉崎の型式論的時期区分は実際に作業を行い、検証したが、ほぼ妥当と考えられる。時期的には反町II-1・2段階に当たると考えているが、本格的な検討は機会を改めて論じたい(注1)。

なお、興味深いことに、同一時期と考えられる一括遺物でも、出土土器群には微妙な時期差があり、完全に同時期とは認められなかった。これは

当然ながら、周溝墓の造営が同時期ではないためである。死亡時期によるずれの現れとして注目される。また、一基の周溝墓からの出土土器の内でも時期差が認められる。土器のみによる周溝墓の群内における位置づけの難しさについては、藤井整(藤井2015)など、多くの研究者が触れており、悩ましい所である。本稿でも造営単位の並行関係を示したいと試みたが無理であった。別編として用意している出土遺物篇で、土器群のそした様相の理由とどの土器が墓の時期を示すのかを明らかにできればと考えている。

4 中耕遺跡

中耕遺跡からは、68基の方形周溝墓が検出されている。

第5図には、群の区分と遺物の出土位置を示した。

以下、まず群ごとにその造営単位と群形成について整理し、次に時期ごとの展開を述べる。

4-1 造営単位と群構成

I群 東西方向に並ぶ1・2(a)と、その南側に約1.5mの距離を置いて、隅を合わせて並ぶ3・4(b)によって構成される。aは、周溝の重複と出土土器の新旧と土器の出土位置により2→1の順序が知られる。bは土器の出土位置と4が3に取りつくような位置関係から、3→4と順序付けた。

II群 7を中心に造営されるa、南東側に展開するb、更に18を起点墓とするC1とC2によって構成される1~14・16~18が該当する。

II aは、7と5・6を出土土器の時期差と土器配置によって、5・6は土層断面により新旧を分けた。5・6は7に取りつくような位置関係にあり、2基で一つの造墓単位であるとともに、7を起点墓とする3基の単位とも言えよう。8は出土土器が7より新相であり、位置関係からもやはり後出と考えられる。軸方向が5に近い。組み合

わせとしては不明瞭だが、更に7・11と位置関係を調整していると考えられるため、両者との関係も考慮する必要がある。全周型の11は、周溝の近接関係からaとしたが、a・bの北側からの通行を塞ぐ位置に造られ、土器配置が先行する周溝墓の存在によって配置できない箇所を避けるように行われている。7が先行する単位であり、5・6と共にa・bの最終段階の築造と考えられる。

II bは12・14の2基である。時期差があるが、位置関係、土器配置とも共通しており、一つの造墓単位として差し支えないであろう。II aの11の土器配置が先行する12の北溝を避けるように行われており、新旧関係が窺われる。

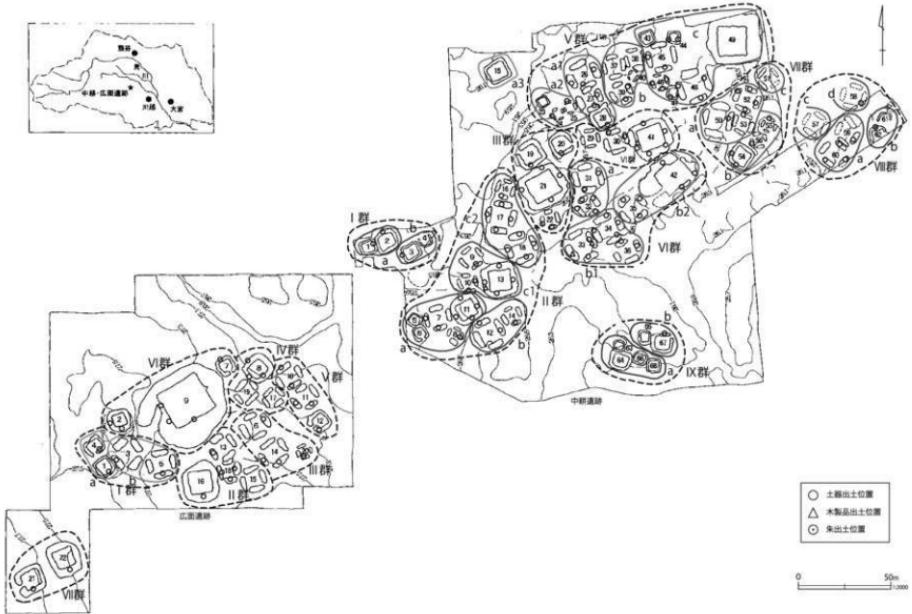
II c1は2期の18を起点墓とし、3期の9・10・13が造られる。出土土器の様相、土器配置から9・10が先行し13が後出すると考えられる。13の北西コーナーは9を意識して変形しており、三者の位置関係は互いを強く意識した一連の造営単位であることを良く示している。しかし、規模の点からは18と13、9と10が組み合わせてあり、2期の18・3期の13、3期の9・10という2つの単位から構成される群ともできる。両方とも間違いではないのだろう。18・13は、平面形が四隅切れと全周であり、異なる平面形の組み合せである。

また10と11も周溝が重複しており、II aとII c1の近しい関係が窺える。

II c2は、II c1同様に2期の18を起点墓とする。北側に隅合せで3期の16・17が造られる。型式論的に同時期と考えられる直口縁壙17・8と16-1が、17では北溝中層から破碎された状態で、16では南溝の溝底直上から遺棄された状態で出土しているため、17→16の順番が考えられる。16はIII群21の北西隅と近接しており、II c2群とIII群の近しい関係が窺える。

II群は複数の軸方向を持ち、一見とりとめのない群構成に思えるが、造営過程を整理し、「墓道」

第5図 中井・広面遺跡の群区分と遺物出土位置（石坂2008をもとに作製）



(註2)の形成を推定すると一定の規則性が認められる。この過程については後述する。

Ⅲ群 Ⅱ群の東側に造営される。全周型3基と四隅切れ1基によって構成される。2期のVIa群31が起点墓と考えられる。21は版築状盛土を持つ大型墓である。19と21は連結溝状の窪みによって連結されている。報告では時期差があるとされているが、出土遺物からはほとんど差が感じられない。ごく近接した時に築造された造営単位と考えられる。22は小規模の四隅切れだが、21の南溝に22を意識した大量の土器が遺棄されているため、22が後出であろう。

4期の20は19に並び、ともに一隅切れの平面形である。20は陸橋部が南東方向に設けられているように見える。しかしこの南西隅は、杉崎の所見によれば周溝が残くなっている箇所で、確認面が高ければ本来全周すると推定されており、陸橋部がV群方向に向いているとはできない。19とは一定の距離が空いているが、軸方向からⅢ群としたい。

また、この20とIV群41の築造によって南北・東西間の「墓道」は塞がれる形になるため、Ⅲ・VI群双方の最終段階での一基と位置付けられる。

IV群 20・29・30・41の、東西に連続する4基である。四隅切れの29・30は、2期のVIa群31に近い軸方向であり、距離がやや離れるため直接の関係は不明だが、31を起点墓とする可能性があるだろう。30を起点に、29は出土遺物がやや新しい。41は、西溝が30の西溝を避け、30の上層が41から連続する粘土に覆われているため、杉崎により後からの築造とされている。四隅切れの29・30が造営単位であり、その東側に全周形の版築盛土を持つ41が取り付く形となる。平面形や方台部の盛土構造は異なるが、30・41は周溝の様相から近しい関係が窺え、注目される。

V群 Ⅲ・Ⅳ群と約8mの距離を置いて北側に展

開する。2期の27・39・45の3基を起点墓に、各々から南北方向に展開する。復元した造営過程から更にa～eに分けられる。

23～28はその造営過程から一つの小群と考えられる。V aとする。更にその展開方向から1～3に分けた。

東側のV a1は27を起点とする。26-27が造営単位である。26は南溝が27の周溝を避け、28は北溝が27を避けて屈曲している。土器配置は27が東溝と南溝に、28は南溝のみに認められる。28は、Ⅲ群の20とともに、Ⅳ・V群の間に3期に存在した東西の「墓道」を塞ぐ形になっており、群内で最も新しいと考えられる。2期の起点墓27に直接連接する4期の28が、最終段階の築造であるのは興味深。

V a2の24・25は、27を起点に展開する小型の一群である。出土遺物は流入したもので時期の指標にはならないが、27に連続する3期に築造されたとしておきたい。位置関係から25→24とできようか。杉崎により4期とされている23は、24・25とやや離れている。出土遺物が皆無だが、全周型で、西側からV群全体への通行を塞ぐ位置にあるため、最も新しいと考えられる。

V a3とした15は単独の1基である。谷地形の中に造られており、黒色土中に方形の灰色粘土を覆土として検出されている。規模・軸方向から、V a2の23やⅢ・Ⅳ群北側の全周型のものと同時期の可能性が考えられる。

V bはV aの西側に近接して、2期の39を起点に展開する。報告書でも指摘されているようにな、37・38は規模・周溝の形態とも相似しており、造営単位であるのは確実である。38の南溝は40を避けるように、遺跡の中でも最も大きく変形しており、37・38が後から造られたのは明らかである。37・38と40の密接な関係が示されている。また38の東溝もV cの45の西溝を

避けて造られており、後出が明らかである。40 同様の密接な関係が窺える。

V c は V b に隣接する。2期の 45 を起点に、3期の 46 ~ 48、4期の 43・44・49 が展開する。46 の北溝は 45 の南溝を避けている。43・44 は 45 の北側の東西の陸橋部を塞ぐ位置にある。4期に2期の起点墓である 45 にあえて取り付く形で造られており、起点墓への強いだわりが感じられる。44 の南西隅から出土したベンガラも、45 を意識したものである可能性がある。

45・46 が造営単位であり、やや離れた 48 も含まれる可能性がある。46・48 とも、北側を除く各周溝に土器配置が行われており、両者の共通性が窺われる。47 は 46・48 の間にある南側からの「築道」を塞ぐ形で、4期に造営される全周超小型の一基である。北側に焼土土坑が設けられているのは 46 を意識した可能性がある。

49 は超大型で幅広の周溝を持つ。遺跡内の他の周溝墓とは調査時からやや異なる印象を受けていた。北側・東側は遊水池にかかっており、別の一群の可能性もあるが、44 と軸方向が一致するため、便宜的に V c に含めておきたい。

VI群 III・IV群に隣接して展開する。2期の 31・34 を起点墓に、各々の南北方向に展開する。復元した造営過程から更に a ~ c に分けた。

北側で、南北に展開する 31・32 を VI a とした。32 の北溝が 31 の南溝をやや避けるように幅が狭くなっているおり、出土土器もやや新旧を示すため、後からの築造と考えられる。南側に隣接する VI b の 34 とは出土土器がやや新しく、後出す。当初から予定されていた可能性もあるが、広面Ⅲ群の 13・15・16 の間に入れ込まれた 18 と同様に、結果として無理に入れ込まれたような印象を受けれる。

VI b は、2期の 34 を起点墓として強く意識し、東西・南側へ展開する一つの小群である。33 の東溝、35 の西溝、36 の北溝が、34 を避けて幅

が狭くなっている。展開過程から 1、2 に分けた。

西側の VI b1 は 34 を起点に、西側の 33、南側の 36 へ展開する 3 基である。ほぼ同一の軸方向をとり、一つの造営単位と考えられる。出土土器も前後に分けられず、極めて近接した時期の築造と考えられる。

34 東側の VI b2 は、2期から 3期にかかる時期の 35、更に東側に造られた 4期の 42 によって構成される。VI b1 同様に 2期の 34 を起点とするが、VI b1 とはやや軸が北にずれ、若干東に振れている。42 は南西溝が幅広で、陸橋部が撥形や斜め方向とされる形態である。方台部が同様の規模で、幅広の周溝が全周する 41 が北側に接するが、陸橋部の開口方向が 35 を向いており、強い意識が感じられるため、一つのまとまりと考えた。

また、42 は 3期に各群に造られた全周型版築状盛土の周溝墓よりも新しく、墓地の最終段階に唯一造られた版築状盛土を持つ大型周溝墓になる。図示されただけでも出土土器が最も多く、III ~ VI群の群構成の最終段階を代表する 1 基として強く意識されていたと考えられる。

41・42 ともに調査時に版築に近い技法を用いた堅固で高さがある方台部の盛土（以下、版築状盛土と呼称）が遺存しており、共通する要素が多い。42 の方台部北側中央には掘削後に方形の造り出しが設けられており、41 に対する強い意識が窺える。

42 は 41 とともに、2期に住居跡が最も集中して造られた集落の中心域で、最後まで墓が造られずに残されていた「広場」のような南北方向の空間を埋めている。その点からも両者は、墓地の最終段階を象徴するまとまりである。墓地全体にかかる群構成という規制はある意味で、最終的に超えているとも言えよう。

VII群 VII・VIII群は III ~ VI群とは異なり、東側に偏った軸をとる。東側の遊水池に広がっており、群全

体の様相を示していない可能性がある。特にVII群は北側全体が遊水池にかかり、不明な部分が多い。

VII群は50～56の7基である。復元した造営過程から更にa～cに分けた。VIIaは2期の50・52・53の3基の造営単位である。53を起点墓とする。50の東溝は53の西溝を避けており、出土土器も新相を示すため、50が新しい。52・53は、53の北溝に完形の土器群が配置されている点と、出土土器の頭部に着目した場合52の方がやや新相と考えられるため、52が後出するとしておきたい。52・53は東溝が同一軸線上にあり、この組み合わせが優先されているように見える。出土土器も50がやや新相の可能性があるため、確実とは言い難いが、53→52→50の順序を想定しておきたい。

VIIbはVIIaの東側に展開する3期の一群である。小規模な55・56は、VIIaの起点墓である53を意識した位置に造られており、53との近しい関係が窺える。出土土器からは55がやや古い印象を受けるが、55の北溝、56の西溝の土器配置からも、一つの造営単位として捉えておくのが妥当であろう。報告では54は更に1段階新しい4期とされている。北溝には土器配置が認められず、既存の墓に対する意識が窺える。前述の広場に面しており、41・42同様に、広場を意識しての最終的構造も考えられる。

VIIcで確認されたのは51の1基のみである。Vaとも距離を置き、軸方向も異なるため、更に東側の遊水池に展開する別の一群としておきたい。

VII群は57～62の6基である。位置関係からa～dに分けた。南北と東側が湧水池になってしまい、全体像は不明である。調査区東端より先是トレンチが入れられており、墓域の東限として確認されている。

VIIaは四隅切れの59・60の2基とした。2期の59を起点に3期の60が連続する。60の北溝が59の南溝を避け湾曲し、出土土器も新相

を示すため、59→60の順序と考えられる。

VIIbは61・62の2基とした。杉崎により4期とされている。61は遺存が悪く、L字形になっているが、本来全周型、一隅切れの周溝墓の一部と考えられる。62も一辺開口となっているが、同様の平面形と考えられる。現状では、2基の全周型によるものとしておきたい。

VIIcは3期の57、VIdは2期の58の一基ずつとしておきたい。各々更に遊水池側に展開すると考えられるため、別の造営単位としておく。

IX群は63～68の6基である。遺跡全体の他より70mほど離れた南東側に位置する。図示可能な土器が出土しているのは66・67に限られ、いずれも4期である。南北2mの間隔を挟んで、大きくa・bに分けられる。

IXaはいずれも全周型である。重複関係は明らかでないが、分布状況から63・64、66・68が造営単位と考えられる。

IXbは全周の65、一隅切れの67の2基とした。67西溝のテラス状張り出しの覆土に、65の東溝が掘り込まれているため、67→65の順序である。

4-2 墓群の形成過程

以上の各群の造営単位と展開を整理したのが、表1、第6～8図である。

本稿では、単位と展開を意識して、更に時期が跨る図を作成した。具体的には、2期、2～3期、3期、3～4期、4期の群形成過程を示した。更に2～4期の1時期を隔てて単位となるものを加えた。

[2期](第6図) まず2期においては、杉崎が指摘するように、集落と開始期の周溝墓が部分的に重複している。第6図上段は、2期の集落と周溝墓の分布を重ねたものである。黒塗りが住居跡である。周溝墓は、住居跡群が分布するF～I-13～16、L～P-3～5、I～K-9～11グリッドの3箇所の外側の7箇所に造られている。

表1-1 中耕遺跡の造墓単位(1)・(2)・(3)

中耕

	群	組合せ	時期	組合時期	新旧関係	判断理由	備考
1	I	2	4	4	2→1	重複、編年	1・2で単位
2		1	4				
3		4	4	4	3→4	配置、土器配置	3・4で単位
4		3	4				
5	II a	6・7	4	3→4	7→(5→6)	5・6断面	5・6で単位
6		5・7	4				
7		5・6	3	3→4	7→(5→6)	7→(5・6) 編年	5・6の起点墓
		11		3→4	7→11	編年	
8		7	4	3(3→4か)	7→8	編年、配置	
9	II c1	10・13	3	3	(10→9)→13	18→(10→9) →13	18→(10→9) →13 9・10で単位
10		9・13	3				
11	II a	7	4	3→4	7→11	編年、土器配置	11土器配置が 12を避ける 群の最終段階
		(12)		2→4	12→11	編年、配置、土器配置	
12	II b	(11)	2	2→3	12→14	編年、配置、土器配置	12・14で単位
		14		2→3	12→14	編年、配置、土器配置	
13	II c1	9・10	3	3	(10→9)→13	編年、配置、土器配置	9・10、18の双方 と単位か
		18		2→3	18→13	編年、配置	
14	II b	12	3	2→3	12→14	編年、配置、土器配置	12・14で単位
15	V a3		4	4		単独	最北
16	II c2	17	3	3	17→16	土器配置、編年、同等期、 土器の出土層位	
17		16					
18	II c2	13	2	2→3	18→13	編年、配置	C ₁ ・C ₂ の起点墓 13と単位
		17		2→3	18→17・16	編年、配置	
19	III	21	4	3→4	21→19	編年、配置、土器配置	21と連結溝
20	III	19・21・22	4	3→4	(19・21・22)→20	編年、配置	群中最終段階
		29・30・41		3→4	(29・30・41)→20	配置、編年	
21	III	19	3	3→4	21→19	編年、配置、土器配置	19と連結溝 21・22が造営 単位
22		22		3	21→22	土器配置	
23	III	21	3				
24	V a 2	25	3	3→4	27・25・24→23	編年、配置	単独
25		24・27		2→3	(27)→25→24	27とは編年、24・25は配置	

表1-2

中耕

	群	組合せ	時期	組合時期	新旧関係	判断理由	備考
26	V a 1	27	3	2→3	(27→26)→28	周溝変形、編年	26・27が単位 28は群中最新
27		26	2				
28		26・27	4	3→4			
29	IV	20	3	3→4	(30→29)→20	隙縫、配置、編年	29・30が単位
		30			(30→29)→41	編年	
30		29	3			周溝変形、粘土	
		41					
31	VI a	32	2	2	31→32	周溝変形、編年 34→32	31・32で単位
32		31	2				
33	VI b1	34	2	2	34→(33・36)	周溝変形 34→32・35	33・34・36で 単位
34		33					
36		34	2				
35	VI b2	42	2~3	3→4	35→42	編年、配置 41→42	35・42が単位 42・41が揃う 42が最終
42		35	4				
37	V b	38	3	2→3	39→40→ 37・38	38とセット	39が起点墓 37-38が単位
38		37・40	3			37とセット、40周溝変形	
39		37・38・40	2			編年、位置	
40		37・38	3			38周溝変形	
41	IV	30	3	3→4	30→41	周溝変形、粘土、41→42	群最終段階
43	V c	45	4	2→4	45→(43・44)	周溝変形、編年	45・46が単位 47が最終 単独、様相異なる 45→(43・44) 45→(46・48) →47
44		45	4			位置、編年	
45		43・44	2			編年、周溝変形、位置	
46		46		2→3	45→46	周溝変形	
46	46	45	3		46→47	編年、46燒土土坑	45・46が単位 47が最終 単独、様相異なる 45→(43・44) 45→(46・48) →47
47		47					
48		46	4	3→4	46→47	覆土48を切る	
48	VII a	48	3	3→4	48→47	軸方向	52・53・50で 単位 53→(50・52) 53→(55・56)
49		47					
50		4	4				
52	VII a	53	2	2	53→50	周溝変形、編年	53→(50・52) 53→(55・56)
53		53	2		53→52	土器配置、編年	

表1-3

中耕

	群	組合せ	時期	組合時期	新旧関係	判断理由	備考		
54	VII b	55・56	4	3→4	55・56→54	55・56 セット、54 とは時期差	(53→)→55・56 →54 55・56 が単位 56 は最終段階		
55		56	3	3					
56		55	3						
51	VII c		3	3	51-○		遊水池側に展開か		
57	VII c		3	3	57-○		遊水池側に展開か		
58	VIII d		2	3	58-○		遊水池側に展開か		
59	VIII a	60	2	2→3	59→60	周溝変形、編年	59・60 が単位		
60		59	3						
61	VIII b	62	4	4	61・62	新旧不明	61・62 が単位か		
62		61	4						
63	IX a	64	4	4	63・64	新旧不明	63・64 が単位		
64		63	4						
66		64・68	4		66・68	新旧不明	66・68 が単位		
68		66	4						
65	IX b	67	4	4	67→65	重複関係	65-67 が単位		
67		65	4						

規模は、ある程度の大小はあるが、それほど差はない。平面形は、いずれも四隅切れである。

単位は、VI群の31・32、33・34が2基2単位で、VII群の50・52・53が3基単位である。この墓地で最も早い段階に形成された造墓単位である。それ以外にV群の27・39も組み合わせの可能性があるが、上述の3単位に比べて間隔が開いており、確実ではない。他のものは単独で、散在して分布する状態である。3期のII c1・2群の起点墓となっている18のように、これから単位を形成する起点墓の造営が始まった段階であると言えよう。

V c の 45 は、4期の小型全周 43・44 が、北溝の東西に取りつくように造られている。起点墓として長く意識されていたと考えられる。43～45 の 3 基を一つの造営単位と見做すことも可能である。

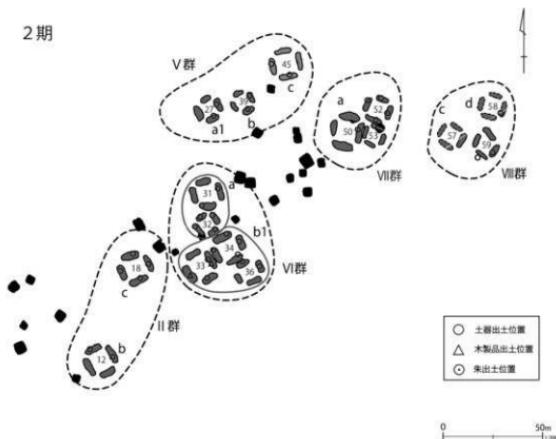
[2～3期] (第6図)

第6図下段に2～3期にかけての造営を示した。2期の起点墓と組み合わせになる3期の墓を加えている。横線が2期のものである。II群の12(2期)-14(3期)、18(2期)-13(3期)、V a1群の27(2期)-26(3期)、V c群の45(2期)-46(3期)、VII群の59(2期)-60(3期)が2基、2期の39を起点墓に、3期の37・38・40が3基で単位を形成している。2基単位を基本とする原則が明顯である。

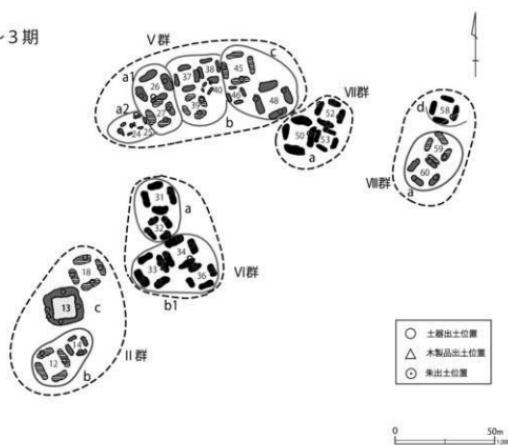
3期のV a2群24・25は、2期の27から引き続く小型のもので、この3基を1単位と見做すことも可能である。同様に27は26のみでなく、4期の28とも組み合わせになっている。27は上述のV a1群の起点墓でもあり、特別な墓として長く意識されていたと考えられる。

造営箇所の選択 視点を変えて、造営の展開方向に着目すると、2期に営まれていた集落側には展

2期



2～3期



第6図 中耕遺跡の群構成過程 (1)

開しないのが分かる。2期の墓を起点に、集落の逆側や外縁に並べられるように展開している。V群の27・39・45は距離を置いて東西方向に展開する。VI群では起点墓である31・34に接続して、32・33に連なる南北、東西の列構成が行われ、その後の他の群の墓造方向を決定づけている。VII群も53を起点に50は西北西方向に、52は北北東方向に展開する。V・VII群の展開の方向もこの段階で既に決まっているようである。

V群においては27・39の南側、VI群においては34の東側、VIIにおいては53の南側は、まだ集落域として意識されていた空間であり、墓が造られなかったものと考えられる。逆に53の西側は、遅く集落域としての意識から外れたために50が造られたとも考えられる。

この集落域の空間としての意識はその後も強く残り、「広場」的な空間として保存されていく。

各群の起点墓となる27・31・34・39・45で、集落側に土器配置が認められるため、集落から墓へ直接至る経路が予想される。前述の「広場」からの往来である。

また、II a12は南側、VII a53は北側、VIII a59、VIII d58は東側に土器配置が見られ、その方向に正面観、経路があった可能性がある。また石坂が指摘したとおり土器配置が南側に偏る傾向があり、南側からの経路の存在を窺わせる。

異なる平面形の組み合わせ II群の四隅切れの18と全周型13は、異なる平面形の組み合わせとして、全体の先駆けとなるものである。同様の組み合わせは3～4期にかけて複数見られる。18・13は、築造順としては間に四隅切れの9・10を挟んでいるが、その上で造営単位となっており、強い意識を感じさせる。

4期に至るまで異なる平面形の組み合わせが行なわれている点は、平面形についての、重要な問題を提起している。その意義については後述したい。

3期(第7図) 第7図上段には、3期の造営を

示した。

3期の中で単位が完結するのは、II c1群の9・10、II c2群の17・16、III群の21・22、IV群の29・30、V a2群の24・25、VII c群の55・56である。V c群の45・46・48は、45・46が単位で、48は45とほぼ同規模、同軸だがやや離れて造られている。いわば2+1としてもいえようか。このV c群とII c1群が3基、その他は2基単位である。2期から継続して、2基単位が主体で、3基単位は数例認められるのみである。IV群は、四隅切れの29・30の単位に、全周型41の1基が付け加えられた形である。本来の単位である29・30よりも、30・41は距離が近く、軸が端しており、より密接な関係が窺える。3基で一つの群としても良いだろう。

この41は版築状盛土を持ち、同様の盛土を持つ4期のVI群42とも最終的に組み合せとなる。群を跨ぐ形となるこの展開については、後述する。

造営箇所の選択 築造箇所については、同じ群内でも2期、2～3期の単位とはやや離れた別の箇所が選ばれている。やはり、旧集落を避ける方向に造られている。

中でも、一見他の単位とは全く異なる軸方向をもつ9・10、16・17、29・30、55・56は、視点を変えると一定の規則性が見出せる。

前述のように、墓域の中には、各所にかつての住居の分布箇所が空隙地として残り、「広場」のような性格を持っていたと考えられる。築造方向を見ると、西側の9-10-16-17の南北の方向性から、群の南西側から北東方向の通行が想定できる。その通路はIII～V群に至るもので、4期の19・20がこれを塞ぐ。この通路を「墓道」と呼んでも差し支えないであろう。この4基はその墓道に面した一番手前の墓であり、「墓道」に合わせた軸方向をとる。墓の累積が通路を形成し、それに沿った単位が造られた状況である。墓道と墓の築

造は、いわば同時進行と見做すことができる。

規模 一方、この段階から規模の格差が明顯になる。版築状盛土が遺存していた 13・21 に代表されるように、従来の周溝墓とは異なる全周型の超大型周溝墓が造られるようになる。こうした特別な墓は、II c1 群と III 群に限られており、群の中での大小、特別な墓の有無という群の間の差が顕在化する様相である。

異なる平面形の組み合わせ 全体が単純に四隅切れ型から全周型に置き換わったわけではなく、全周型と四隅切れ型の組み合わせの造営単位が認められる点は重要である。しかも基本的に 2 基単位という原則が崩れない。両者が交錯する形で群を構成する様相は、四隅切れ型の墓を造っていた集団から、傾斜的に全周型の墓を造る集団へ移行する実態を示すものである。石坂が指摘するように、その機縁となつたのは 13・21 のような版築状盛土を持つ群内では特別なタイプの周溝墓の築造であったのだろう。

[3～4期(第7図)] 第7図下段には、3～4期にかけての造営を示した。横線は3期の7・26・27・35・45・48で、起点墓となる。網掛けはこれらの起点墓と組み合わせになる4期の墓である。V群の27は2期だが、同一の造営単位の起点墓として意識されているものとして加えた。既に3期の中で単位を形成しているものに、更に4期のものが付け加わる場合が多く見受けられるのが特徴である。

II a 群は 7(3期)を中心、東側の 5・6(4期)、西側の 11(4期)の東西両方向に展開している。5・6のみを単位とするか、5～7を単位とするか、7・11を単位とするかは判然としないが、規模からは 5・6(4期)、7・11(3・4期)の 2 基二組の単位から構成されるるのが妥当であろう。

III群の全周型 21 は、3期の内に 22 と単位を構成するが、北側の 19(4期)も、連結溝状の窪

みによって連結されており、密接な関係が窺える。21・22 を単位とするが最終的に 3～4 期に跨る 3 基の群とも言えよう。

一方、前述のように 19 は 20(4期)と単位を構成するため、II a 群同様 3～4 期にわたる 2 基二組の単位によって構成されていることになる。

V c 群では、小型全周の 4 期 47 が、3 期の四隅切れ 45・46・48 と組み合せになる。46 と 48 の間に無理に埋め込まれるように造られており、あたかも南北の通行を塞ぐかのようである。

VI b2 群の 42(4期)は、版築状盛土を持つ最終の 1 基である。前述のように四隅切れの 35(3期)と一つの単位となる。3期の他の版築状盛土を持つ全周型のものも、四隅切れのものと単位を構成している。35・42 も同様の 3～4 期に跨る、異なる平面形の組み合わせとなる一つの単位として良いだろう。

IV群 41(3期)は、前述のように 30(3期)との密接な関係が窺える。29・30 の単位に一基が加えられている形になっている。

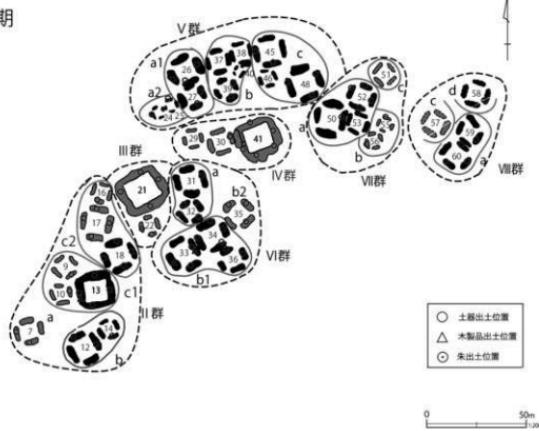
一方で、規模・盛土構造・平面形・位置関係からは、Vib2 群の 42(4期)と共通する要素が多く、最終的な景観として組み合わせになっていたと考えられる。41 は、その位置関係を充分に意識した上で、最終的に 42 と組み合わせとなるような位置取りをしたと考えられる。両者とも、群の最終的に築造が可能な場所に造られており、結果として複数の群に跨る造営単位に見える形になったと考えられる。

42 の築造によって、2期の集落の中心域に残されていた「広場」はなくなることになる。

VII b も同様に、3期四隅切れの 55・56 の南西延長線上に全周の 54 が造られている。3期の単位に 4 期の 1 基が加えられ、最終的に 3～4 期に跨る 3 基の群になっている。

上述の各々の群で、4 期に造られる墓は、3 期の墓へ連なる意識と、最後の墓としての築造とい

3期



3~4期



第7図 中耕遺跡の群構成過程（2）

う強い意識を感じられる。

造営単位の基數は、3期の単位に、4期の1基が付け加えられ3基となる場合、4期の2基単位が取り付く場合、3期の1基と2期単位となるものがある。最終的に他の群と跨る組み合わせとなるような景観を形成する場合も2基単位である。引き続き、造営単位は2基を基本に、一部が3基で変わらない。

群を跨ぐ組み合わせの景観が形成される場合も、最後の造墓があくまで既存の群構成の延長線上にあり、最終的に群を跨ぐ景観になるという両方の状況から、造営単位としての原則を尊重しつつ、お互いの造営集団が最終的な景観として、それを望み、許容するほどの近しい関係であったことを示しているのではないだろうか。

造営箇所の選択 築造箇所については、3期までの群の延長線に当たる箇所で、前述の「墓道」や「広場」を塞ぐ位置に造られており、最終段階としての造墓箇所が意識されていると考えられる。これまで避けられていた旧集落の一部にも重複しており、それでも完全に重複してしまうわけではないようだが、意識的に築造されたとも考えられる。

規模 3期の中型の35との単位となる全周型の42は版築盛土を持つ超大型周溝墓が見られる一方、3期の中型7と組み合わせになる5・6などの超小型のものが見られるようになり、規模の分化が進む。

4期の版築全周型周溝墓は3期の13・21が造られたII c1・III・IV群ではなく、VI群の42のみとなり、継続していない。固定的な格差とはなっていない様相が見て取れる。

異なる平面形の組み合わせ 4期に築造されるのは、全て全周型である。しかし、3～4期にかけては全周型のみでは単位にならず、3期に統いて四隅切れ型との組み合わせで造営単位となっている。両者が交錯する形での群構成が継続する。

6で別に検討する、特異な陸橋部を持つ42は、

四隅切れの35と単位を造る。異なる平面形が組み合わせとなる単位の象徴的な例とできよう。

4期(第8図) 第8図上段には4期の造営を示した。4期の中で単位が完結するのは、I群、VII b群、IX群のみである。V c49、VI b2-42を除いて、全て全周、超小型である。

I a群1-2、I b群3-4、VII b群61-62、IX a群63-64、66-68、IX b群65-67が造営単位で、いずれも2基の単位である。前述のように2～4期を通じて2基の原則が守られていると言えよう。3期のものとの組み合わせで最終的に3基となるものも見られる。

前節で述べたが、41-42のように異なる群の間で、最終的な景観として2基の組み合わせとなる様相も見られる。中耕跡の方形周溝墓造営においては、2基という単位が大原則であったものと考えられる。

その中で、V a3とした15は単独の全周型の1基である。V c群とした全周超大型の49も現状では単独である。前述のように、49の周溝はこの後検討する広面9に次いで横幅に広く、特異である。これらの単独のものは周溝墓ではない可能性も感じさせる(福田2014)。しかし、調査区外の未知の周溝墓と群を構成する可能性は充分にあるため、あくまで現状での認識としておきたい。

造営箇所の選択 I・VII・IX群は、これまでの造営箇所とは離れた場所が選択されている。I群は、これまで避けられていた旧集落に重複している。その意図は汲みかねるが、墓地形成の最終段階には旧集落を含めた土地全体を放棄するという意味合いがあるのかもしれない。

また、3～4期の項で述べたが、3期と組み合わせになるものは、「墓道」を塞ぐ最終的な位置に造られている。墓地を閉塞する意味があるのでだろうか。

VII b群は、VII群の東側の一部で、群全体としては2期から継続しており、後述の2～4期の範



第8図 中耕遺跡の群構成過程（3）

疎とできる可能性がある。

群全体の4期の造墓履間の特徴は、旧集落との重複、墓道の閉塞、小型、超小型規模の外縁の配置である。墓地の最終段階の造墓行為とすることができよう。

規模 4期のみのI・VII b・IX群はいずれも超大型である。超大型は、単独の49のみである。前述のように、3期と単位となる4期のものには大小がある。両方の様相を合わせてみると、造墓の最終段階である4期には、超大型、大型、中型、小型、超小型と全ての大きさがあり、しかも全周型版築式周溝墓も見られる。これを階層差とみると、階層分化が進んだ結果とも言えるだろう。

一般的に墓地の最終段階には超小型のものが選択的に造られる可能性も考えられるが、他遺跡との比較が必要と思われるため、即断は避けたい。

異なる平面形の組み合わせ 4期のものは、いずれも全周型である。

VII b群の2基は、VIII群のその他の四隅切れとやや距離を置くが、連続する一群とするならば、四隅切れの群と全周型の群の組み合わせとも言えよう。

[2～4期] (第8図) 各時期の中でも触れたが、隣接する時期のみではなく、時期を隔てた組み合わせが見られる。2期の四隅切れV a1群27は、3期の26のみでなく、4期の28とも組み合わせになる。V a1群は27を起点に2～4期にわたって継続する。27は起点墓として長く意識されていて特別な一基と言えるであろう。V c群の4期43・44は2期の四隅切れの45北端東西に取りつくように造られている。やはり45も特別な一基と考えられる。こうした時期を隔てた組み合わせについては、更に次節で述べる。

4-3 小結

以上のように、中耕遺跡の各群、各時期の様相を整理してきた。本項で、中耕遺跡について、ひとまずまとめておきたい。

造営単位 造営単位は、各群、各時期を通して2基が基本である。多くが同時期だが、二つの時期に跨る場合もある。時期が跨る場合でも、隣接する時期であれば、それほどの隔たりを想定しなくても良いだろう。土器からは前後関係が決め難いような同時期の中での組み合わせが大部分である。こうした様相は、造墓が近接した時間幅で、強くお互いを意識して行われたためと考えられる。かつて筆者は、さいたま市井沼遺跡の群の一つの単位が、共通した土器の使用状況から同世代であるとしたが(福田2007)、中耕遺跡におけるこうした近接した時間幅の中で、先行する墓を強く意識した造営単位の構成、あるいはその時期が跨る場合の単位の構成も、やはり同世代による造営単位の形成を示しているとできるだろう。更に分析例を増やす必要があるが、方形周溝墓の造営は世代原理によるものと考えられる。

加えて、別に示したように、この同世代の「2」は、夫婦関係ではなく、血縁関係にあるものと推定される(福田2021)。血縁関係にある同世代が造営単位なのである。

起点墓 まず、各群における起点墓とそれに接続する墓を確認しておこう。

VII群の33・34は既に2期に造営単位を構成しているが、34は33がない3方向すべてに3期の32・35・36が取り付いている。群内で特別な存在であったのが窺える。また2期のV群27は、3期の24・25、26、28と直接組み合わせになっており、四方に向かっての起点となっている。2期のV a1群27、V c群45は、3期のものと単位を構成しているが、更に4期のものが組み合わせになっている。V c群で4期の43・44が2期の45に取り付く様相は、45がIV群34同様に、特別な存在として意識されているのを窺わせる。またII a群の3期7も4期の5・6・11が組み合わせとなる。

こうした特別な墓は、強く意識された起点墓と

して評価できる。では、その強い意識とは何であろうか。福田 2021 で述べたように、藤井整は墓地が形成されている間、時期を隔てて連結がなされるこうした起点墓を、「始祖墓」として評価している（藤井 2015）。具体的な「始祖」の性格付けはないが、中耕遺跡における時期を隔てた特定の墓への「こだわり」は、やはり同様の評価が可能と思われる。本稿では、上述のような「特別な墓」を「始祖墓」と指定する。

もう一度そうした視点で、各群を見ると、もちろん方形なので列状を呈するが、起点墓を中心とした集まり、ブロックとしてみることが可能である（註3）。この起点墓を「始祖」墓とし、上述のように各造営単位を血縁関係とするのであれば、こうしたブロックは出自集団を現わすものと考えられる。同様の造墓展開については、藤井も出自集団をもとに特徴としている（藤井 2017）。中耕遺跡では、出自集団をもとにした墓群形成が行われているとして差し支えないであろう。

以上のように、中耕遺跡の墓地は、同世代の血縁関係を基礎に、出自集団ごとに群を形成して構成されていると考えられる。

規模の組み合わせ 築造が始まった2期ではほぼ同規模であり、大小の差が明瞭に認められるのは、3期になってからである。

石坂が指摘するように、13・21のような群中の特別な墓である版築状盛土を持つ全周型墓の築造を機縁に規模の大小が明瞭となる。4期には更に規模的分化が進み、超大型、大型、中型、小型、超小型が認められる。

その一方で、同じ造営単位の中でも大小が認められる。極端な例はⅢ群の21・22、V b群の37・38・40であろう。特に後者においては、規模的には格下の40を37・38の周溝が避けている。方形周溝墓群内の規模の大小が厳然たる階層差を示すものであるなら、こうした築造時の配

慮は無用の筈である。そこには、「階層」による説明が万能であるかのような考え方の危うさが見え隠れする（註4）。

しかし、たかだか 10 m 前後の規模の墓の築造に、厳然たる階層差を想定することの危うさを、前述の37・38・40の関係はよく示している。

しかし規模の差は確かに存在し、それに伴う労働力の差もまた明らかである。そのため、ここでは註4のような「階層」についての認識に基づき、規模の格差を階層差の表現としておく。

加えて注意しておきたいのは、大型のみで構成される造営単位が喟かないことである。大小が階層の表現とすると、階層が固定されているのであれば、同一規模のみで構成される群が形成される筈である。一つの群の中に大型墓が固定されないのであれば、ここでいう階層は固定的ではなく、活動的、可変的であると捉えるべきであろう。大庭重信らが以前から指摘するように、近畿地方では弥生時代後期以降に、大型墓のみの群が見られるようになる（大庭 2005）。出現期古墳が登場する古墳時代前期に至っても、中耕・広面遺跡で固定化された様相が見られないのは、注目すべき差異である。

更に興味深いのは、IV群3期の41とVI b2群の4期の42の、墓群形成の最終段階での、本来帰属する群を超えるように並ぶ配置である。

この様相については二通りの考え方ができる。第一は、墓に表現された階層的な優位性が、群の間で「移動」や「継承」される可能性である。既にみたように、3期段階で複数の群で、版築状盛土を持つ大型周溝墓が見られるため、群内での大小が示す階層的な位相はあまり変わらないと思われる。その中の、意図的な配置は、特別な墓の造営が土器では分けきれないほどの時間的な幅で、特定の世代に死亡順に割り振られていた可能性を示す。

もう一つの考え方は、これをVI b2群の造営集

団が、この墓地全体を形成した集団における階層的優位性を、造墓単位を跨いで、最終的に表現したと考えるものである。群からの逸脱とも言え、4期の半跡において階層の社会的な意味や考え方が変化した可能性があるだろう。

前者にせよ、後者にせよ、他遺跡でも同様の様相が見られるのであれば、階層の変質を示す造墓行為として、今後検証していく必要がある。

異なる平面形の組み合わせ 古くから知られているように、弥生時代後期の吉ヶ谷式の分布圏の周溝墓の平面形は四隅切れである。中耕遺跡でも造墓開始期の2期では全ての周溝墓が四隅切れである。それが全周型に移行していく過程については、石坂が前述のようにまとめたとおりである。3期の項でも述べたように、筆者が重視したいのは13・21のような版築状盛土を持つ全周型周溝墓が、13は9・10・18と、21は全周型の19とともに四隅切れの22とも造墓単位を構成する点である。しかも、22が後出している。また、四隅切れの45に取りつく全周型の43・44が示すように、両者の関係は排他的なものではない。従つて、四隅切れの造墓集団が全周型を採用して、そちら側にシフトしていくと言えるであろう。石坂が指摘するように、4期に全周型が3期までの四隅切れの規模を引き継いでいる点も両者の関係をよく現わしている。

この四隅切れと全周型の関係については、中耕・広面遺跡のみではなく、比企地域全体の問題であるため、6に一項を設けて検討したい。

造墓箇所の選択と展開 造墓箇所の選択については、各時期でまとめてきたが、ここでは位置取りに重点を置いてみていただきたい。

2の冒頭で述べたように、中耕・広面遺跡の遺構の分布は、北東・南西方向の、最大幅120m、長さ550mの、再堆積のシルトロームで形成された微高地に限られている。南北に離れる一群もあるが、原則として幅50mの帯状の範囲に収ま

る。遺構の軸方向は、その平坦面の広がる方向とほぼ一致している。住居全ての軸方向がその方向に影響を受けているとは言い難いが、概ねそれに平行もしくは直交する。規模の大きな周溝墓は、この方向とコントラの方向に、ほぼ軸方向が規制されている。

集落を含めた遺跡全体としては、直線的ではないが、中耕12と36、60を結んだ西北西・東南東のラインより南側には遺構が見出せない。広面でもこの延長線上に15・20・21・22があり、その南側には遺構が分布しない。最終的には中耕IX群がその南側に造られるようになるが、例外的である。このラインが、群全体の軸方向の目安となった可能性がある。

このように集落・墓地全体の軸方向が大きく地形による影響を受けているため、最終的な全体の景観は、中耕・広面で、先のラインに並んだ大きな2箇所の塊状になっている。周辺が森林でなければ、このまままりは島の上の墓地としてその外側から見られていたと考えられる。旧越辺川に向かって、標高を減しながら広がる北側の湿地は日常的な往来があったとは考えづらく、台地側である南側からの景観が意識されていたと推定される。特に、規模の大きな周溝墓は南側から見て並ぶように造られており、その結果として平面的にも列状の群となつたと考えられる。

石坂が指摘するように、南側に土器配置の偏りが見られるのも、南側からの視線が意識された結果とも考えられる。逆に北側に土器配置が希薄なのもそのためであろう。

2期 前述のように、2期には集落が存在しており、住居の分布域の外周7箇所から造墓が開始される。IIa群12は北西側、III群18は北東側、V～VII群は調査区中央に密集する住居群との対応を考えられる。しかし、それを越えて、住居と同一軸方向で、一定の距離が保たれている起点墓の個々の位置が決められた具体的な理由は見出せな

い。

また、軸方向はⅡ～Ⅵ群とⅦ・Ⅷ群で、当初から大きく2方向に分かれている。大きく二つの造墓集団があるためと推定されるが、やはり何故軸方向を違っているのか、その基準はどこから来るのかは明らかでない。

2期の内でも、V群の27・39・45は距離を置いて東西方向に、VI群では起点墓である31・34に接続して、32・33の南北、東西の列構成が行われ、その後の建築方向を決定づけている。VII群も53を起点に50は西北西方向に、52は北北東方向に展開している。VII・VIII群の展開の方もこの段階で既に決まっているようである。

ここで注意しなければならないのは墓群形成前から營まれていた集落の存在である。V群においては27・39の南側、VI群においては34の東側、VIIにおいては53の南側は、まだ集落域として意識されていた空間であり、その方向には墓が造られなかったものと考えられる。逆に53の西側は早く集落域から外れたために50が造られたものと考えられる。

この集落域の意識はその後も強く残り、「広場」的な空間として保存されていく。

次に、集落から各墓群に至る経路だが、各群の起点墓となる27・31・34・39・45では、集落側に土器配置が認められ、集落から墓へ直接至る経路が予想される。IIaの12は南側、VIIaの53は北側、VIIaの59、VIIdの58は東側に土器配置が見られ、その方向に正面觀、「墓道」があつた可能性がある。また、南側に偏る土器配置は、南側からの「墓道」の存在を窺わせるが確実ではない。

[2～3期] 2期の起点墓に接続して造られたと考えられる3期の墓は、同一の列を構成するものと、所謂調合せのものが見られる。

先行する2期の墓が造られた後、系譜関係を具体的に示すように、それに接する形、あるいは軸

を合わせる形で3期の墓が造られるのは自然な造墓行為であろう。いまだに集落の存在は意識されていたと考えられ、基本的にはそれと被らず、かつ2期の墓と軸方向を揃えられる箇所に展開している。逆に集落側に入ってくるVI群35やVII群48は、その箇所が集落のエリアとして意識されなくなり、造墓空間となったため、「集落側」からの経路により近く、見られる側に造られた結果の位置取りと考えられる。

結果としてV群26・37・38の北側への展開により、墓群の北側が造墓のための通路となり、見る側となった。同時に18から9・10・13側の展開により、西端集落側の集落エリアが縮小するとともに、西側からの造墓通路として9・10の西側が意識されたものと考えられる。

[3期] 更にVI群の西側の空白域にⅢ群の建築が始まると、Ⅲ群の起点墓である21は、始祖墓の一つである31と並び、かつその系列を引くと考えられる33と同軸である。始祖墓の一つである18とも同軸であり、全周版築状盛土という外来系周溝墓であるが、在来の集団の規制を強く受けている。

Ⅲ群の建築箇所は2期段階の集落域だが、住居の跡(SJ18～23)には重ならない。3期当初には集落域、あるいはそれが転じた「広場」としての意識が残っていたため、重ねての建築は行なわなかったのではないだろうか。

また意識的に大きく空けられていたともみられるV群とVI群の間の空間にもIV群29・30が造られる。ただし、この箇所は住居が建っていないかった箇所であり、住居の跡を避けて造られたとも考えられる。居住空間としての性格が失われても、意識は続いているのだろうか。被葬者と住居の住人との関係性が窺われる。それでも3期の内は、29・30・41の南北は空けられており、「墓道」として機能したものと考えられる。

IIc2群16・17が造られた場所も、その意識

の消失とともに造墓空間に転じたと考えられる。しかも 16・17 は II c の 19・10 によって広がった西側の造墓ラインに沿って造られているため、その西側に「墓道」が存在するようになったと考えられる。

始祖墓の一つである 27 の西側にも、V 群 a2 の 24・25 が造られるが、南側の大型住居 SJ35 とは重複しない。

VII群は 2期の 52・53 の北東側に 51 が造られ、その列の東側が通路状の空間となっていたのが分かる。55・56 は 3期にその空間に造られている。

この 3つの事例により、逆に空けられていた空間が、東西方向の墓道としても意識されていたのが明らかになった。

この段階で、造墓・あるいはその維持のために一定の通路となっていた「墓道」が浮き彫りになつた。しかし、その空間は常設的な空間ではなかつた。通路としての機能もその上に新たな墓が造られるまでの暫定的なものであった。もちろん、ここでの検討のみで、方形周溝墓群における造墓展開と「墓道」の存在について云々するは早計である。別稿にて検討しなければならないのは言うまでもない。「広場」についても同様である。

3期でも新しい時期に、IV群の 41 の築造によって、2期から3期の間続いている、かつての集落・住居を避ける造墓習慣に大きな転換が見られる。30 の東側に連接する全周型版築盛土のこの墓は、それまで「広場」状に意識されてきた住居跡の密集域に造られる。更に 4期の 42 も、統いてその「広場」に造られる。この後 4期の各群の周溝墓は、後述するように「墓道」状の空間を塞ぐように造られ、墓地はやがて終焉を迎える。41 は、4期の「広場」や「墓道」を塞ぐ先駆けとも言えるであろう。

[3~4期] 41 の築造によって、空白域となっていた箇所への造墓が始まる。7-11, 21-19・20, 35-42, 55・56-54 の組み合わせによって、こ

れまで避けられていた旧集落のほとんどの箇所に墓が造られる。墓道や広場となっていた箇所も塞がれ、墓地の最終段階という意識が働いているとも考えられる。

何度も取り上げているように、III群 41 と VI群 42 は群を跨いだ組み合わせとなっており、この両者によって「広場」が潰されるのが、墓地の終焉を象徴している。

加えて、7-5・6、45-43・44 のように、列の外側に小型の墓が取り付くのも、もとの墓への強い意識と共に、もうそのものの墓へは来ない、入らないのだという意思表示とも考えられる。

[4期] 4期では、上述の 3期と組み合わせになるものとは別に、3期までに形成された群に近接した外周に造られるものと、新たに 4期に形成される群がある。

外周に造られているのは、15・23・49・61・62 である。特に 15・23・49 は、これまでの群とは、まるで無関係のように離れた位置取りである。最終的な墓の築造が、これまで頑なに守られていた 2基一组の原則を外れて行なわれている。その意図は不明と言わざるを得ず、他遺跡の例と合わせて検討する必要があるだろう。VIIb 群 61-62 の単位は、3-4期の組み合わせである II 群 7 に連接する 5・6 と同様の墓である印象を受ける。離れて造られる I・IX群と、これまでの群との横渡し的な様相とも言えるであろう。

これまでの群とは、まったく無関係のように展開するのが I・IX群である。規模も周溝の様相も、これまでとは全く異なる両群は、ただ軸方向のみが他の群と共通する。I 群は II~VI 群と、IX 群は VII・VIII 群と、ほぼ同じ方向である。これまでの群構成における軸方向から見た大きな 2つの集団の流れを、最終的に引き継いでいるとも言えよう。

また、4-2 でみたように、I 群は旧集落に重複している。3~4期の 41・42 のように、これまで保存してきた旧集落である「広場」を放棄

してしまうのである。やはり同じ項で述べたように、墓地形成の最終段階に旧集落を含めた土地全体を放棄するという意味合いがあるのでかもしれない。

墓地遺跡の最終段階で小型、超小型のもののみが独立した群を形成する様相は、4期か中耕遺跡では、方形周溝墓の被葬者の社会的な位置づけや、あるいは方形周溝墓の価値そのものが変わった大きな転換点であることを示している。

5 広面遺跡

広面遺跡は、中耕遺跡の西側に離れた方形周溝墓群である。見方によっては中耕遺跡の離れた支群ともできるが、別の微高地に展開しているため、当初から異なる集団による造営と考えられる。

広面遺跡からは、方形周溝墓 22 基が検出されている。出土土器と土器配置については、前述のように、既に拙稿（福田 2008）で検討した。

その際には土器配置を重視して検討したが、築造順序などの基本的な事柄については位置関係等の検討が充分でなかった。ここで、もう一度群構成と群の配置に重点をおいて検討してみたい。

5-1 広面遺跡の造営単位

I 群は西側の 1・3・4・5 とした。I a は、やや軸がずれる 3 期の四脚切れ 3・5 の 2 基である。9 の陸橋部を塞ぐように位置取りされている。土器配置も 3 の西溝、5 の南溝を中心に行われており、9 を背にした外側へ向けられたと考えられる。出土土器は 5 がやや新相と考えられるため、当初 9 への南側からの「墓道」を 5 が塞ぐようになったとも考えられる。

I b 群とした 1・4 は、I a の 3 に接続する IV 期の一群である。3 を起点墓とした 2 基の単位である。中耕 II a 群のように、群の重複を許すのであれば 3 基の単位ともできよう。南東部に土器配置が認められる。4 は 1 と間隔が空き、開口した陸橋部に面した南溝の東端に土器配置が

見られるため、1 の存在を前提とした西側からの出入りが意識されていると考えられる。

II 群は 13・15・16・18 号の 4 基である。2 期の 13 を起点に、他の 3 基は 3 期に展開する。平面形を基準にすれば、全周の 16 を除いて東側 3 基を分ける案も可能である。しかし、13・15・16 の真ん中に造られた 18 は、全体の形を変えてまで、3 基の間に嵌め込まれており、4 基の密接な関係は疑り得ない。一つの造営単位とすべきであろう。

また、18 の北溝は、13 の南溝とも重複し、特に密接な関係の表示である「連結」の状態にある。

他にも、3 期の 3 基は、2 期の 13 に比して軸方向が東側に振れており、軸方向から単位を分けることもできる。

造営単位は、連結する 13-18 の 2 基と、南溝の軸を合わせる 15-16 の 2 基との二組の単位とできる。形としては 2 基単位の組み合わせになるが、やはり 18 の全体の形を変えてまでの築造は、4 基全体の一つの強いまとまりを示している。

III 群は 6・14 の 2 基に、離れた 20 を加えた 3 基である。2 期の 14 を起点に、3 期に他の 2 基は展開する。同軸、同大の 6-14 が造営単位と考えられる。土器配置も 2 基で、全体の外側に向けられるように配置されている。

この 6・14 は II 群の 2 期 13 とも同軸、同大である。13-6-14 の間で、2~3 期にわたる強い規則性が窺われる。

超小型の 20 は、14 の南東隅から約 5 m 離れ、やや距離があるが、他の墓からは更に隔たっており、III 群とするべきであろう。土器配置も南側が意識されている。また、II 群の 3 期の 3 基と同様に、この 1 基のみ軸方向がやや東に振れている。位置としては、6・11・12・14・17 に囲まれた後述する「広場」への南側からの通行を塞ぐ位

置に当たり、「広場」を取り囲む複数の群の中でも最終的な造墓の可能性がある。

IV群は8・17・19の3基である。四隅切れの2期19と3期17は側を合わせるとともに、17の西溝と19の東溝が直線上に並んでおり、造営単位としての高い意識と規則性が窺える。17の東溝はV群10の西溝と、0.8mほどの距離で接する。17の東溝に多くの土器配置がなされているため、17が先行すると考えられる。

4期の全周型8は、南隅が19の東溝を避けて造られており、19が起点墓として長く意識されていたのが分かる。土器配置も南北に限らず、あえて周溝が細くなった19と接する箇所に壺、小型丸底壺、器台が集中して配置されており、19への強い意識が窺える。また、9の東側突出部に象徴される19・9・7へ至る墓道を最終的に塞ぐ位置取りである点にも留意が必要だろう。

V群は最も東に位置する。四隅切れの10・11に、南に1.5m離れた中央陸橋12を加えた3基である。同軸、同大で、均等な間隔の位置取りという強い規則性を見出す。それを前提に、11の西側に20m×20mの空白域が存在すると指摘する。中耕の場合とは異なるが、以下では、この空白域を「広場」と呼称する。

12は、その「広場」のある西側に陸橋部を開く中央陸橋型である。北溝の突出部が11の南側陸橋部と合う位置に設けられており、11への意識を窺わせる。陸橋部際に配置された大型壺も、西側の「広場」への意識を示唆するものである。

VI群は2・7・9の3基である。超特大の9は盛土が現存しており、その上に柊が立つ、通称柊塚である。盛土部分の調査は行われず、公園化さ

れて、形は変わったが現存している。

3期の9の西溝の先端に廟合せの形で、同じく3期の2が造られている。9の陸橋部への通行を意識するかのように西溝と南溝に土器配置が行われている。出土土器がI a群の3・5がやや古相、2が新相を示すため、前述した9への南からの「墓道」とともに、3の北側からも9への「墓道」が存在した可能性がある。

7は9の東溝の北側に取り付くように近接して造られている。9の東側突出部の延長線に直交する方向で陸橋部が開いている。19と7の間に、9の突出部へ向けての「墓道」の存在が示唆される。

また、北溝の中央に第一次埋積土の堆積後に土器が配置されている。北側の低地から見られることを意識したものと考えられるため、墓地全体を取り巻く「墓道」とは異なる一定の空間の存在が窺える。

9は両遺跡で最大の規模を誇り、柿沼幹夫が指摘するように様々な問題を提起する存在だが、本論ではとても扱いきれないため、別稿で検討することにしたい。

VII群は、全周型の22(3期)と中央陸橋型の21(4期)の2基である。これまで墓が造られなかった、谷を挟んでやや離れた南西の微高地に造られており、独立した一群である。

5-2 墓群の形成過程

以上の各群の造営単位と展開を整理したのが、表2、第9～11図である。

中耕遺跡同様に昭に杉崎、石坂の両氏も変遷図を示している。広面遺跡でも、単位と展開を意識して、時期に跨る図を挿入した。

以下、前節を踏まえて時期を追って墓群の形成過程を見ていく。

[2期](第9図)まず中耕遺跡との違いとして、墓地造営当初の集落の有無が挙げられる。広面遺跡が占地する微高地は墓のみしか、古墳時代の遺

構がなく、集落の存在は認められない。

II～IV群の3箇所で、13・14・19の各1基が造られている。これらは、いずれも四隅切れで、同一の軸方向、ほぼ同規模である。中耕では2期のみで完結する造墓単位が複数認められるのに対して、広面では単数のみであるため、中耕より遅れて造墓が始まると考えられる。

また、II群の18は変形してまで13と重複し、III群の8はこの2期の19と組合せになる。2期の起点墓に対する強い意識が窺える。

造営箇所の選択 中耕は集落の外縁で墓の建造が開始されていたが、広面での最初墓の位置決定の具体的な基準は明確でない。周囲より若干高い27.5 mの箇所ではあるが、ほとんど視認できる高まりではなく、現段階では不明と言わざるを得ない。

[2～3期] (第10図) 第10図上段に、2期の起点墓と組み合わせになる3期の墓を加えた、2～3期にかけての造営を示した。横線が2期のものである。III群の14(2期)・6(3期)、IV群の19(2期)・17(3期)が2基である。III群は20を加えた場合、3基となる。

II群の13(2期)・15・16・18(3期)は、前述のように、3基を強く意識した18の存在を重視し、2～3期に形成された一連の造墓単位としておきたい。

造営箇所の選択 2期の13・14・19が起点墓である。その位置そのものに何か法則性があるとは考えられないが、単位となる3期の、14は6、13は15、19は17の場所を空けているかのような位置取りである。墓地の開設当初に、この3単位のみは位置取りを取り決めていたのかもしれない。

II群15は14に並べられそうだが、あえて場所をずらしているように見受けられる。当初から18を間にれる予定があったかのようである。18は中耕VI群32のように、本来は15と14の

間にきれいに入る予定だった可能性がある。15の軸方向のずれと16の造営箇所が東寄りで、周溝もそれまでの四隅切れのものより幅広になってしまい、合わせて15に近い軸方向をとらざるを得なかつたために、無理やり入れ込む状態になったと考えられる。

また、15・16とII b群の5は、同軸方向に近く、一定の距離を置いて造られている。16は平面形も異なるが、造墓に当たって共通の意識が働いていた可能性がある。

異なる平面形の組み合わせ 中耕遺跡同様に、3期から全周型と四隅切れの組み合わせが、一つの造営単位を構成する。

[3期] (第10図) 第10図下段に、3期の造営を示した。横線が2～3期に単位を構成した3期のもの、網かけは3期で単位を構成するものである。22は4期の21と単位になるが、3期に造られたので加えている。

3期の中で単位が完結するのは、I a群の3-5のみである。V群は3～4期にかかるが、北側の10-11は3期の造営単位である。基本は2基単位である。

中耕・広面遺跡で最大の規模を誇る9は、3期の2、4期の7と組み合わせになる。

3～4期の起点墓となる3期のものは、3・11・9が該当する。いずれも既に3期の中で単位を構成しており、それに4期の単位が加わる形である。

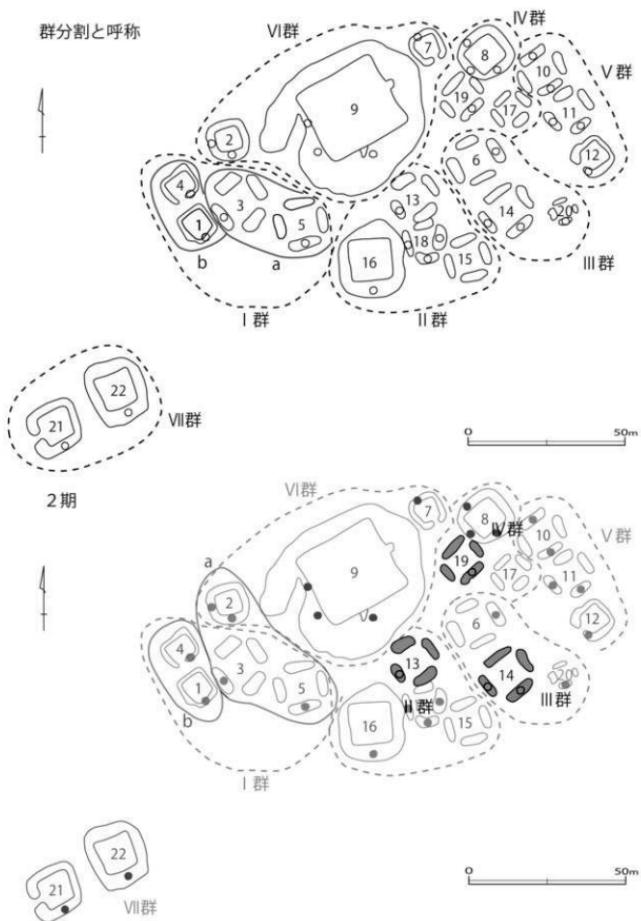
造営箇所の選択 造営箇所については、2～3期に見られた南北方向とは別に、東西方向への大きな展開、離れたVII群の造営が始まり、墓地が最も大きく拡大する。

全体の造営箇所の選択に大きな影響を持つのが9である。9の南側突出部は、13西溝の延長線上にあり、東辺は13東溝と14西溝の間の中心ライン上にある。3期6が、その中心ラインを軸として13の対称位置に造られているのもその

表2-1

広面

	群	組合せ	時期	組合時期	新旧関係	判断理由	備考
5	I a	3	3	3	3 → 4	2の土器が新相。 3とは時期差、位置。1・4は土器配置。	3・5が単位。 9を囲むように位置取りされている。
3		2					
		1					
1	I b	3	4	4	I a3 → (1 → 4)	3と4は土器配置。	1・4が単位。
		4					
4		1	4				
13	II	15	2	2 → 3	3	13 → (15・16) → 18 13・18は重複関係。中央に18が全体を変形して嵌め込まれている。	15・16・18が単位
15		16	3				
		18					
16		15	3				
18		18					
13・15・16	III	3	2 → 3	14 → (6 → 20)	20は離れており、時期と位置関係から後出。	6・14が単位	
6		14	3				
14		6	2				
20		14	3				
8	IV	19	4	2 → 4	19 → 8	8は周溝変形。V群10とは土器配置。	17・19が単位
19		8					
		17	2	2 → 3	17 → 19		
17		19					
(V 10)	V				17 → 10	10 → 11は土器配置。 11 → 12は編年、北溝突出部。	10・11が単位
10		(IV 17)					
		11	3	3			
11		10					
12		12		3 → 4			
11	VI	4					
2		9	3		9 → 2	土器配置	2・9が単位
7		9	3	3 → 4	9 → 7	編年、配置	
9	VII	7	4				
21		22	4	3 → 4	22 → 21	編年、配置、土器配置	21・22が単位
22		21	3				



第9図 広面遺跡の群構成過程（1）

存在を示唆している。

つまり、9の位置取りは、2期の13・14の位置、軸方向に規定されているのである。墓の築造が、規模や平面形に関わらず一貫した規則の下で実施される好例である。

また、土器の様相からは、他の3期のものよりも先んじての築造が考えられるため、I a群に代表される3期の群形成を先導する働きが推定される。

9に設けられた施設からも、全体の群構成、位置どりについて知ることができる。9の施設としては、①西側に、南方向に斜めに取りつく陸橋部、②方台部の南側突出部、③東側突出部が設けられている。

① I a群は、陸橋部への通行を塞ぐ位置取りがされており、9の後に造られているのが分かる。更に3の南東溝は9の陸橋部と同一のコンタとなる箇所に方向を揃えており、3の南東溝の東側を通って9に至る「墓道」の存在が窺える。その「墓道」は、5の築造によって塞がれることになる。

②南側突出部は、Ⅲ群の2期13西溝の土器配置の延長線上にある。同様に、9の土器配置も既存の墓を意識するかのように南側と東側に行われており、土器配置が行われた時には、それが外側から見えていたと考えられる。そのため南側突出部の土器配置を隠すような位置に造られている16は、9より後に造られた可能性が高い。

通行を塞ぐ位置取りという点では、5も16と共に通しており、出土土器もほぼ同時期である。9への通行を中心とした造墓が展開しているのである。

③東側突出部は、19の北溝の北側方向を向いており、19北側を通って9へ至る「墓道」の存在が示唆される。4期の7の陸橋部開口方向、8の築造もその存在を示唆している。

以上のように、9の施設から、各周溝墓がいかに9を意識し、9への墓道とそれを塞ぐ形で展開

しているかを知ることが出来た。

次に、各周溝墓の位置どりに重要な役割を果たしたのは、「広場」であろう。

6・11・12・14・17に囲まれた「広場」は3期に形成が始まり、4期まで継続している。

6や11の土器配置に見られるように、各群の周溝墓は、「広場」の方向への土器配置を行っている。

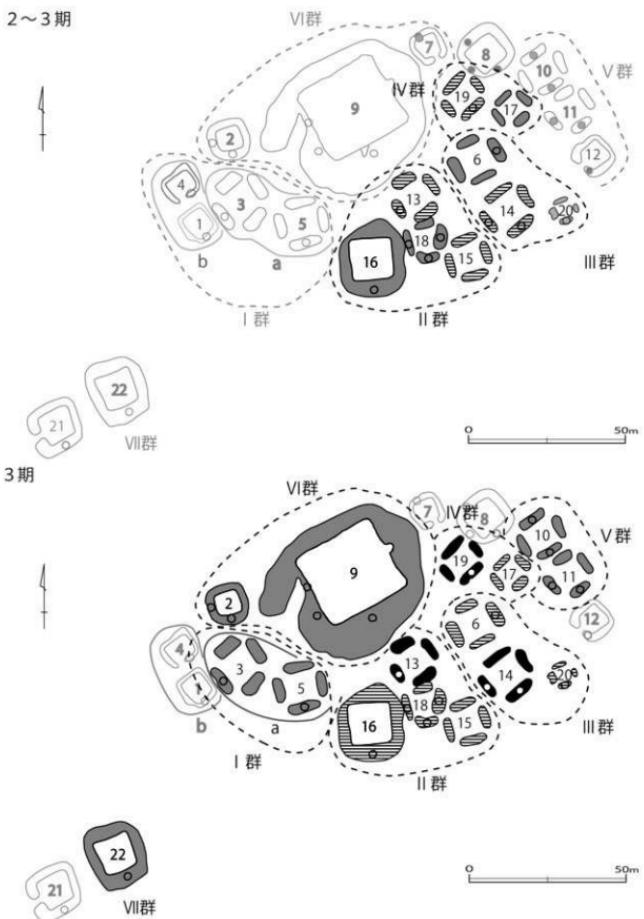
この「広場」は、中耕の旧集落の「広場」とはやや異なるが、両遺跡に限らず、方形周溝墓群造営に大きく関係する問題と考えられるため、改めて詳論することとしたい。ここでは、その存在の指摘に留める。

また、3期には、これまで墓が造られなかった、南西の微高地に全周型の22が造られる。村田が述べるように本来は桑原遺跡の東端に当たる。

墓地の造営に対応する集落の存在は不明だが、中耕遺跡も合わせて2期から3期にかけて、造営単位の飛躍的増加は明らかであり、広面遺跡の墓地に対応する集落でも、単位のものとある造営集団が増加したと考えられる。

規模 一方、中耕遺跡ほどではないが、この段階から規模の大小分明になる。周溝を含む全体の規模では、再三挙げている9や16・22のような全周型の周溝墓が大きい。ただし、方台部の規模では9のみが突出しており、平面形での格差は不明瞭である。むしろ、広面では9の特別性が際立っていると言えるであろう。

異なる平面形の組み合わせ 中耕同様に、3期から全周型と四隅切れ型の組み合わせで、一つの造営単位を構成している点は重要である。特にⅡ群は起点墓と密接な関係が推定される全周型と四隅切れが一つの単位を構成しており、象徴的である。中耕同様に、四隅切れ型の墓を造っている集団から傾向的に全周型の墓を造る集団へ移行する可能性が高い。その機縁となったのは、やはり超大型の9の築造であろう。



第10図 広面遺跡の群構成過程（2）

軸方向の分化 3期になると、2期と同様の軸方向のものに加えて、これまでとは軸方向がより北に振れる一群が現れる。前者は3・9～11で、2期のものと単位になる6・17も含まれる。後者は2・5・15・16・18・22である。この違いが何を意味しているのかは不明だが、I a群、II群のように一つの造営単位の中でも両者が見られる場合がある。特にII群は、18が軸方向の異なる起点墓13と重複しており、この違いが直ちに決定的な造墓集団の違いを示すものではないのが分かる。

しかし、同様の軸方向の違いは、中耕遺跡でも4期まで継続しており、大きな意味があると推定される。単なる造営集団の違いを超えたもっと大きなレベルの違いを示す可能性がある。

[3～4期] (第11図) 起点墓となる3期の3-9・11・14・22を横線で、組み合せとなる4期の1・4・7・8・12・20・21を網かけで示した。2期の19と組み合せになる4期の8も前者を横線、後者を網かけとしている。既に3期の中で形成された造営単位に、更に4期のものが組み合わせとなっている。

I b群は前述のようにI a群の3を起点に西側の1・4(4期)が展開する。前述のように西側からの出入りが想定され、南から回り込むような「墓道」の存在が推定される。

III群は超小型の四隅切れ20が、2期の14の南東側から約5m離れて築造されている。前述のように14は3期の6との造営単位であり、それに付け加えられる形となる。2期の起点墓、四隅切れ19に4期の全周型8が組み合わせになる。19(2期)・17(3期)が既存の造営単位であり、それに付け加えられる形である。8は19に近接する南コーナーを変形させるほど近さが意識されており、密接な関係が窺える。

V群の12は、3期の10-11との組み合わせで、8と同様に既存の造営単位に付け加えられて

いる。前述のように北溝に突出部が設けられており、11への強い意識が窺える。陸橋部は「広場」の方向に開いており、「広場」を介して他の墓への意識も窺える。

VI群の7は、5-1で述べたように、3期の9への「墓道」に向けて陸橋部が開口している。9の東溝突出部の輪線に、開口部のラインがのっていいる。

I a群2とは、9を挟んで対称の位置どりである。土器配置は2が9を意識しているのに対して、7は北側の空間を意識している。8の土器配置と合わせて、墓地での最終的な行為とも考えられる。

VII群は、中央陸橋型の21が3期の全周型22との組み合わせとして造られている。陸橋部の開口方向には古墳時代前期の遺構ではなく、西側に広がる中期以降に柔軟運動が行われる微高地に向けられており、西側方向への「墓道」の存在が窺える。また21と共に南溝に土器配置が見られ、東西方向の「墓道」の存在も推定される。墓地の西縁への通行が示唆されているとも言えよう。未知の住居跡群の存在も考えられる。

規模 広面でも4期は8・21を除いて、いずれも規模が小さい。中規模の8・21は、同規模の19(2期)・22(3期)との組み合わせであり、他の小型のものは、既存の中規模の造営単位に付け加えられる形である。

異なる平面形の組み合わせ 4期の周溝墓は、全くもしくは中央陸橋型である。そのため、2・3期の四隅切れの単位と群を形成するものは、自ずと異なる平面形との組み合わせになる。中耕同様に、平面形が出自集団のような生活に直結する表示でないためと考えられる。

[4期] (第11図) 4期の中だけで単位が形成されるのは、I b群の1・4のみである。2期の19に取り付く8を除き、他は3期の墓との組み合わせである。

墓地の最終段階に当たる4期に、中耕42に当たるような版築状盛土を持つものは見られない。8・21は中型だが、他は全周もしくは中央陸橋型で規模は小さい。中耕の造墓集団に最終段階まで大型墓が造られるのは対照的である。中耕と広面の造墓集団間で格差が生じた状態で、墓地が終息したと考えられる。

前述のように、いずれも既存の単位に1基のみが付け加えられる形で、小型同士でも独自に新たな単位を形成していた中耕とは、その点からも格差を感じられる。

5-3 小結

以上のように広面遺跡の造営単位、群構成、時期ごとの展開について検討した。ここで広面遺跡について、まとめておきたい。

時期 中耕同様に2期から造営が始まり、4期に終息する。中耕は集落の最終段階と造墓の開始時期が重なっているため、周溝墓と住居跡群との対応がある程度想定できたが、広面の場合は明らかでない。中耕の2期の集落のみで、両遺跡の2期の周溝墓と対応させるのは無理があるため、事業対象地外のいわゆる集落が存在するものと考えられる。

造営単位 造墓単位を構成する基數は、中耕遺跡同様に、各群、各時期を通して同時期の2基が基本である。

II群の13・15・16・18は、2～3期にかかる4基の一連の造墓単位として捉えられる。16は全周版築状盛土タイプである可能性があり、2期から継続し、最終的に版築状盛土を持つ42が造られる中耕VI群のような中彌的な一群と考えられる。

特異な周溝墓である9も、ごく小規模の2・7と組み合わせて、軸方向もII群2期の13・14・19と共通する。やはり、群の中の一基であることを超えていないのは留意すべきであろう。

起点墓 II～IV群において、13・14・19の3

基から造営が始まるが、2期の内で単位が完結するものは見られない。II群は13との15との間に、無理に3期の18が造られている。13は群中の起点墓として意識されているのである。IV群19も4期の8が東溝を避ける状態で造られており、土器配置からも群中の起点墓としての意識が窺える。

中耕Vc群のように強い意識は窺えないが、起点墓への時期を隔てた働きかけと考えられる。中耕同様、これらを「始祖墓」として位置付けて差し支えないであろう。

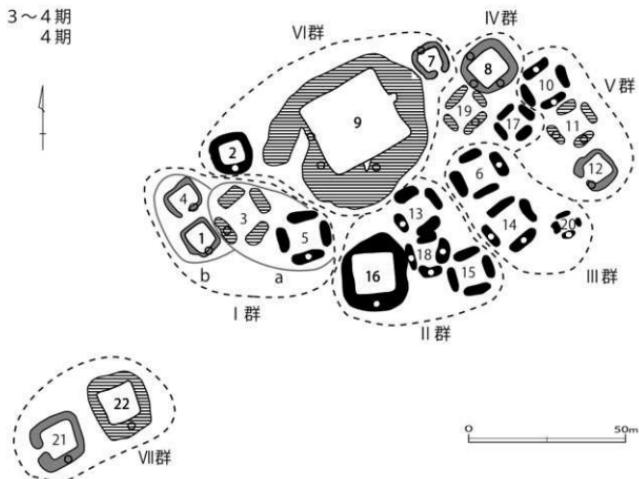
広面遺跡でも中耕同様に、「始祖墓」を常に意識した、出自集団をもとにした墓群形成が行われていると考えられる。

規模の組み合わせ 墓地の造営が始まった2期は、いずれもほぼ同規模である。2～3期のものも、ほぼ同規模である。規模の大小が明顯に認められるのは、3期に造られる単位である。中耕同様に、3期における9・16のような全周型は規模が大きく、16は削平されていたが、版築状盛土を持つと考えられ、墓群中でも特別な墓として造られた可能性がある。中耕同様にこの3期に、規模の分化が進み、超大型、大型、中型、小型、超小型が認められる。

4期では、離れたVII群の中規模の21を除き、中耕42・49のような全周型、中央陸橋型の規模の大きなものは認められない。中型に近いものは8のみで、中耕I・IX群のような周溝幅の狭い規模の小さなもののみとなる。中耕遺跡との対照的な様相は、墓地形成最終段階における両遺跡の造墓集団の力の優劣の表現とも考えられる。

その中で、VII群の21・22は継続して規模を保っている。広面本体の集団とは一線を画している可能性がある。

異なる平面形の組み合わせ 広面でも造墓開始時の2期は、全ての周溝墓が四隅切れである。やはり3期以降に四隅切れと全周型が存在する。IV群



第11図 中耕遺跡の群構成過程（3）

では、2期の四隅切れ19と4期の全周8が、連接している。前述のように18を中心とした13・15・18の4基は、全周型と四隅切れ型の混成であり、両平面形の造営者が一つの単位を形成する関係にあることを象徴している。四隅切れの造営集団が全周型を採用した結果と考えられる。中耕の様相と合せて6で更に述べることにしたい。

造営箇所の選択と展開 中耕・広面遺跡の造営箇所の選択について、大きく地形の影響を受けているのは中耕のまとめで述べた通りである。

ただし、広面遺跡の最終的な景観は9を中心としたブロック状を呈している。墓地の造営が可能な範囲の地形にもよるのだろうが、3期の9の造営以降、強く9が意識され続けた結果とも考えられる。

3期の造営箇所の選択と位置取りについては、5-2で9を軸に詳述した。また4期については3

期との組み合わせのみで、中耕遺跡のように独自に群を形成するものは見られない。

6 中耕・広面遺跡における問題

これまでの検討の中で、特に問題と考えられる点について、更に考察を加えたい。

異なる平面形の組み合わせ 古くから知られているように、弥生時代後期の吉ヶ谷式の分布圏の周溝墓の平面形は四隅切れである。中耕遺跡でも造営開始期の2期では全ての周溝墓が四隅切れである。それが全周型に移行していく過程については、石坂が前述のようにまとめたとおりである。

この四隅切れと全周型の関係については、以前から吉ヶ谷式研究の第一人者である柿沼幹夫が、川越市上組II遺跡（黒坂1989）などを例に、全周型の南関東系の集団を四隅切れ型の吉ヶ谷式集団が主体的に受け入れていった結果としている

(柿沼 2014)。柿沼は「墓域への転化は両集団員の合意に基づく同族的結合を確認する共同体的行為であって、その行為こそが「長」のカリスマ性を高めることになった」(柿沼同 pp.33)と説いている。

中耕・広面遺跡における両平面形は、前述のように同格であり、排他的でもない。断続的ではなく、傾斜的に変化する。そのため、この変化は造営集団の上下関係によるものではない。「長」のカリスマ性云々は別として、柿沼の説の妥当性は高いと考えられる。

その上で、両方の関係性を検討する上で確認しておかねばならないのは、方形周溝墓の造営単位となる被葬者間の関係である。既に拙稿(福田 2021)で示したように、単位を構成する被葬者間の関係は、婚入者を含まない「血縁関係にある」同世代の可能性が高い。田中良之が提唱した「キヨウダイ原理」による造営が行われたと考えられる。

すると、方形周溝墓の平面形が血縁関係をもとにした出自集団の表示あるとするならば、本稿や柿沼が示したような両方の平面形が造営単位になることは、異なる血縁にある者が、血縁関係のあるキヨウダイとなることを示し、矛盾する。

いくら墓地が現実社会の鏡であるといつても、本来墓地は生きている者が、死後の世界はこのような世界であると考えている世界観が示される場である筈である。そこで最も重視されているのは「血縁」なのである。

現世利益的に擬制的な親族関係を結んだとしても、それを死後の世界にまで新たな「血縁」として持ち込めるとは考えにくい。もし、そうであるならば血縁関係をもとにした出自集団という枠組みそのものが壊れてしまいかねない。いくらでも血縁関係の変更ができるからである。

しかし、これは平面形が血縁関係のある同一の出自集団の表現のように極めて厳密な運用を必要とする場合である。全周型周溝墓がそれをもたら

した集団しかそれを造らない、造れない出自集団独自の形式であり、四隅切れ形も同様であるならば、同じ造営単位の構成はあり得ない。仮に彼らが既存の墓地に埋葬されるほど定着したとしても、全周型のみの単位を形成するはずである。

以上のように平面形は、集団の出自集団のようないくつかの血縁関係の表示とはできない。

方形周溝墓の平面形が何を意味するかは、この墓制の研究当初からの大きな問題だが、現状においてその答えを持っている者はいない(註5)。血縁関係を越えた同祖集団のような広がりが想定されるが、考古学の方法では、その意味を明らかにできないだろう。

また、良く知られるように、関東地方ではこうした周溝墓の平面形の広がりが、概ね土器型式の分布域とほぼ重なる。そのため、ここでは平面形を、土器の分布圏のような地域のまとまりの表現として考えるに留めたい。

周溝墓の四隅切れと全周型が一つの単位を構成する様相は、その背景に具体的な社会関係が推定されるというレベルの差はあるが、土器の型式変化の途上に起るキメラと同様のものとも言えるであろう。その直接の理由は不明だが、方形周溝墓の型式転換が起こったのである。

しかし、土器とは異なり、集落や集団の共同作業である墓の造営や最も保守的である筈の「埋葬」に当たっては、何らかの「決定」が必要だったものと推定される。2期の四隅切れと4期の全周型が組み合わせとなるように、群の中では始祖墓に対する強い意識が保持されており、出自集団としてのまとまりは損なわれていない。やはり、そうではない「決定」は、柿沼が言う「両集団員の合意」に基づく何かと思われる。

新しい築造工法の導入 中耕・広面遺跡では、弥生時代の東日本では見られなかった方形周溝墓の築造工法が導入される。石坂が指摘するように、最初に登場する全周型が版築状盛土工法により方

台部の盛土が構築されている点は留意すべきである。単にどちらかの平面形の造墓集団が、そのまま造墓しているとは考え難いからである。

拙稿(福田2017)で述べたように、関東地方における古墳時代の周溝墓の埋葬施設の設置方法には、弥生時代以来の設置方法である「地山掘え置き型」と、古墳時代に始まる方台部の盛土内に設置する「盛土内設置型」がある。後者は埋葬施設を設置できるだけの強度が必要である。つまり、強度を上げる方法による盛土方法が求められるわけである。版築状盛土は弥生時代の埴丘墓の盛土方法を発展させた古墳の埴丘で用いられている工法であり、いわば「外来系」の工法である。埋葬施設の設置方法と盛土工法がセットになって、両「外来系」要素を持つ周溝墓の構造が可能になったと考えられる。

この技術がどうやって実践されたのかは大いに議論すべきであろう。導入の経緯、実践の在り方が、在来集団とそれをもたらした集団との関係を具体的に示しているとも考えられるからである。

平面形については、前項で出自集団のような血縁関係の表示ではなく、土器型式のようなもっと大きな地域的なまとまりを示すものと述べた。その変化が土器の型式変化と共に、これらの新来の技術が導入されるのも、新たな土器型式変化の際に見られる製作技法の転換や「外来系器種」の導入と同様の、型式変化に伴う「外来系」技術としての評価が可能となる。つまり、当時生活のあらゆる場面で見られた外来系文物の一つとして、在来集団が主体的に取り入れたものと評価できるのである。

そうであるならば、問題をその技術の導入の方法と手段、導入の意義に切り替える。経緯の一つとして他地域の集団を外縁集団とするような婚姻関係の想定も可能である。しかも一旦導入に

成功すれば、直接的な関係性がなくても造墓は可能となる。その際には、造墓集団の系譜を表徵する表現としての意味はもうない。要請があれば、必要に応じての工事が可能だからである。しかし、投入される労働力が大きいため、誰しもができるわけではなかったであろう。中耕・広面遺跡において確認された例も、規模の大きなものに限られている。そこに一定の階層を見出すことも可能である。

その代表例が広面9号であろう。斜めに取りつく陸橋部が設けられた全周する周溝、南側、東側の突出部、版築状盛土と推定される方台部、焼成前底部穿孔壺といった多くの「外来系」要素を持つ。しかし、一方では吉ヶ谷系の所謂超大型壺や吉ヶ谷系土器が多く出土する。外来系要素と在来系要素の関係を最もよく示している好例である。両者を並立させた被葬者の力量が窺えるとともに、周囲の四隅切れ周溝墓の位置関係に規則を受けているため、あくまで墓道は在来の規則を超えるものではない。在来の造墓技術者がそれまでの墓地運営の流れの中で、從来の規則に基づいて、新たな工法や儀礼を取り入れ、墓道を主導したと推定される(註6)。

こうした外来系文物導入の問題については、既に私見を述べ、そこではこうした技術の保持者との直接的な婚姻関係を想定した(福田2014)。しかし、方形周溝墓の構造技術もその範疇として捉えるならば、その関係性について改めて考える必要があろう(註7)。古墳時代前期の社会関係の本質的な問題を含むと考えられるため、詳細は機会を改めて検討したい。

墓道と広場 両遺跡の「墓群の形成過程」でまとめたように、中耕・広面遺跡では、当初から設定されていた計画線としての墓道ではなく、墓域が形成されていく過程で通路が固定化し、「墓道」となる。中耕II c1群9・10やII c2群16・17は、その「墓道」に沿って構築されている。

墓地形成において、通路としての「墓道」が決定的な役割を果たすのは、その造営途中の計画線としてではない。逆にそれが塞がれる際にその存在が際立つ。実用面とは別に、その時こそ象徴的な役割を果たしているのである。

また両遺跡では「広場」と呼称した空間が3期に顕在化し、4期まで継続する。「墓道」同様に最終的にはその箇所にも造墓が行われている。「広場」は、それを意識した造墓箇所の選択や土器配置が行われているため、墓域において大きな役割があったと考えられる。

この「墓道」と「広場」を巡っては、これまでにも研究が進められてきた。両遺跡に限らず、方形周溝墓群造営に大きく関係する問題と考えられるため、機会を改めて検討することにしたい。

7まとめ

以上、中耕・広面遺跡の造墓過程と群構成について検討してきた。最後に本稿の内容についてまとめ、今後の課題を提示したい。

造墓単位と造墓団体

- ① 造墓単位は基本的に2基で、3基の場合が少數認められる。規模、平面形に関わらず2基の単位が守られており、この単位が示す社会的な紐帯が、当時最重要視されていた。
- ② 2基は土器が示す一時期、あるいは近接した2時期に跨る期間で造営されている。短い時間幅で単位が形成されるため、基本的に2基は同一世代と考えられる。
- ③ 各群の中で、起点墓の単位から複数方向への展開が見られる。各群の中で、起点墓を含む2期の単位に4期の墓が継続する例が見られる。起点墓が始祖墓として意識されている現れである。血縁を重視した出自集団による墓群形成である。
- ④ 血縁関係の世代原理が最優先されている。同一世代による血族関係を基本単位とする

「キヨウダイ原理」が造営原理と考えられる。

規模

- ① 大小の規模で一つの造営単位を構成する場合がある。大小の組合せに築造時の被葬者の階層」は関係しない。

- ② 異なる時期で、同一の規模のみで群構成が行われない。「階層」は世襲されず流動的である。

外来系周溝墓

- ① 四隅切れと全周型の異なる平面形が一つの造営単位を構成する。平面形は出自等の社会的な枠組みの表示ではなく、土器型式の分布圏のような地域的なまとまりを示す。全周型の平面形は、「外来系」の要素である。
- ② 高く堅固な盛土を構築する「版築状盛土」工法も、「外来系周溝墓」の一つの要素として導入される。
- ③ 中耕SH42・広面9は、斜めに陸橋部を取り付く特異なものである。両者とも「版築状盛土」工法が用いられ、焼成前穿孔壺が出土している。突出した規模、全ての外来系要素と在来系要素を併せ持つ、そのため墓群中最も高い「階層」の墓と考えられる。
- ④ 特別な周溝墓も2基の造営単位であり、それのみで独立しない。同じ群の中で特別な墓は継続して造られない。「階層」は固定的でなく、世襲されないと考えられる。

造墓箇所の選択と広場

- ① 集落が存在している段階で周溝墓の造営が始まる。住居の分布箇所の外縁箇所から造墓が始まる。
- ② 造墓箇所は当初から複数である。複数の造墓団体による造営が推定される。
- ③ 軸方向も複数の方向性がある。複数の造墓団体による造営が推定される。
- ④ 具体的な造墓箇所の選択や、先行する造営単位に接続する際の方向性の規則は不明である。

- ⑤ 基本的に住居が存在した箇所を避けるように墓が造られている。結果として、「広場」が形成される。
- ⑥ 「広場」の方向に土器配置が行われている。広場は中耕・広面の造墓集団にとって重要な空間。広場側から墓を見ると考えられる。
- ⑦ 造墓活動の最終段階で「広場」に墓を造る。他の墓と広場の関係性の終焉。造墓活動の終焉を意味する。

墓道

- ① 墓地のケアや追加儀礼のために必要な通路は、2期には不明瞭だが、3期になると明瞭になり、「墓道」となる。
- ② 「墓道」は通路であり、計画線としての役割を持たない。
- ③ 「墓道」が固定化した後に、中耕II c2、広面I aのように、それに沿って墓が造られる場合がある。
- ④ 個々の墓への出入り方向、陸橋部の開口方向に墓が造られる場合がある。通行路がある時点で不要になることを示す。
- ⑤ 造墓活動が終わる4期に、それまで造られた墓への通行を完全に塞ぐ位置に墓が造られる。墓域への出入りの終了、造墓活動の終了を意味する。
- ⑥ 墓道や広場を塞ぐ箇所に造られる墓は、自らが属する造営単位のみではなく、他の造営単位とも単位と見えるような位置や方向性、規模で造られている。

最終段階の周溝墓群

- ① 最終段階には、小型のものが多く見られ、中耕I群・IX群のように、それのみで独立した群を構成するものと、II・III期の起点墓と組み合わせになるものがある。
- ② 中耕北側の4期の全周型15・23・45は単独で遺物がほとんど出土せず、他の周溝墓と様相が異なる。

- ③ 小規模な周溝墓や大型の違和感のある周溝墓の造営は、墓地の最終段階に、造営についての方針転換や意識変化があった可能性を示す。

中耕・広面遺跡の詳細な検討によって上述の各点が明らかになった。特に本来の目的である造営単位が、血縁関係にある同世代の2基であることが明らかになった意義は大きい。どのような組み合わせの場合にもこの規則は守られている。合わせて、出自集団単位による群形成が明らかになった。血縁関係の同世代、出自集団が基礎である点は、当時の社会の在り方を推定する上で重要な知見である。

同様の推定は、前稿(福田2021)で示したように、藤井整、大庭重信等によって弥生時代の西日本の例を中心に既に多く行なわれている。本稿での推定は、広く列島全体で同様の社会体制が取られていた可能性を示唆している。加えて、それが古墳時代前期にまで下るとすれば、古墳という大きなモニュメントの渠道がなされたにもかかわらず、それを支えた社会の実態は、弥生時代までのそれと大きく変わることになる。方形周溝墓と古墳という墓制の造営体制は、実は全く異なる枠組みであった可能性がある。この点については、逆に西日本にある古墳時代前期の方形周溝墓群について本稿と同様の検討を試み、検証したい。

他にも、平面形の異なる組み合せや版築状盛土、造墓の位置取りと墓道、広場、最終段階における特徴的な造墓について検討し私見を述べた。

いずれも事実関係の指摘のみで、今後詳細な検討が必要である。特に、平面形や版築状盛土を「外来系周溝墓」の要素としたが、その評価も含めて大いに議論する必要があるだろう。

また、墓道や広場については、計画線ではなく群を形成する中で道路や空間として現れ、結果として位置取りを規制するとした。古墳時代前期の

方形周溝墓群形成の実態、その背景となる社会の様相を推定する上での大きな検討課題である。

以上の課題はこの遺跡、関東地方に限らず、前述の造営単位と同様に、全国的な問題である。本稿の検討を足掛かりに検討を進めていきたい。

最後に、2で示した石坂が行ったような出土遺物の詳細な検討は、本稿の検討同様の基礎作業として行わねばならないだろう。両者が揃って、初めて充分な議論の土台になる。本文中でも若干触れているが、本稿作成時に一部に着手しているた

め、早晚その責を果たしたいと考えている。

謝辞

本稿を作成するに当たり、以下の方々に御教示・御協力頂きました。感謝いたします。

飯塚真人 石坂俊郎 魚水環 加藤隆則 栗岡潤
杉崎茂樹 鈴木宏和 西川修一 比田井克仁 藤
井整 山岸良二 山崎世理愛 横山未來 渡辺清
志

註1 中耕、広面両遺跡に接する比企地域における土器編年については、これまでにも論じてきたところである（赤熊・福田 2011 ほか）。学史的にも様々な問題があるが、現状では反町遺跡の報告における時期区分を用いるのが妥当であろう。中耕遺跡出土土器群の時期区分との細かい対応については墓を改めることとし、中耕2期を反町I～5～H-I期、中耕3期をII一期、中耕4期をII～2期として、おおよそ位置付けておきたい。

註2 群を構成する方形周溝墓群の造営に当たっては、そのための通路が必要であるのは言うまでもない。埋葬後の追加儀礼や、隣接して新たに墓を造るに際しても「墓道」は必要である。確かに「墓道」は存在する。

問題は、そこにそれ以上の機能、造営の「計画線」としての役割や特に群を分けるような「区画」としての機能が求められるかである。

方形周溝墓における墓道の研究は、福井県教育委員会による墓道の想定とそれらに基づく造墓活動の推定から本格的に始まった（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986）。

多くの文献でも取り上げられてきたが、正式報告書のまとめでは、異なる造墓展開が推定されている。

「報報で推定した各方形周溝墓へ連なる「墓道」は、結果的に形成され」、「これまで説明さ

れていたような計画的に造営されたものではなく、造営の結果、最終的に整然と並んだことになる。」（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2019pp. 218）

結果としての墓道形成が行われたとして、それに基づく群構成は否定されている。

この「墓道」は、水野正好のあまりにも有名な『古代史発掘6』の一章である「群集墳の構造と性格」（水野 1975）に導かれたと考えられる。あまりにも有名なこの論文は、群集墳の形成の論理を鮮やかに明らかにした見事なものだが、あくまで取り上げた群集墳の形成についての一つの解釈の枠を出るものではない。

他にも、計画線としての「墓道」の存在を前提とする論文は数多い。群構成を考える上で重要な問題なのは言うまでもないが、ここでそれらに論評を加えるのは無理があるため、別に譲らざるを得ない。

しかし、既に埼玉県さいたま市井沼遺跡の検討（福田 2007）や、この後の本稿の検討でも明らかのように、固定された「墓道」は、ある程度群形形成が進み、墓の並びや土器配置から「こしか通れない」通路として確定して成立するのが実状と考えられる。当初からの固定的な「墓道」は存在しないではないだろうか。

そのため、「墓道」が造墓行為に影響を及ぼすのは、ある程度群の形成が進み、通路として

確定してから後と考えられる。逆にその存在が際立つの、最終的な造墓行為を終える段階で、墓地への通行が塞がれる時であるとの印象を本稿の検討では強く受けた。

我々が見ている全体図は、調査が終了して、全ての埋め土が取り除かれた空っぽの状態である。造墓活動が終了した状態で、遺物もない。「墓道」はそうした状態で、我々によって見出される「装置」と言えるであろう。

しかし、一方で実際に遺構としての墓道は存在する。大阪府東大阪市瓜生堂遺跡では、方形周溝墓1の方部盛土から連続して北に基底幅4m、高さ1mの「堤状造構1」が延びている。単なる墓道ではなく、盛土形成のための作業用通路としての機能も推定されている（大阪府文化財センター 2004）。

要棺墓の例となるが、佐賀県神埼市吉野ヶ里遺跡では、北墳丘墓に取り付く付属施設としての「墓道状造構」が検出されている（佐賀県教育委員会 1992・2018）。

こうした例は、現状で確認したかぎりでは、ごく限られており一般的ではないようである。しかし、やはり「墓道」は存在することを、この兩例は教えてくれる。

また中耕遺跡の住居が存在した箇所や、広面遺跡の3期に成立する「広場」は、4期にまで継続する。特に、広面では「広場」に向かっての土器配置が明瞭である。

愛知県一宮市猫島遺跡では、2つの環濠を挟まれた通路から広場へ入り、その周間に建物と土塹墓、周溝墓が營まれている（愛知県埋蔵文化財センター 2003）。

ただし、この広場が一般的なものであるとの確証は得られていない。また、その機能についても同様である。従って、現状では特別な意味づけを持つ「広場」としては使用できない。

本稿では、便宜的に「墓道」や「広場」といった用語を用いるが、以上のような理由からその用語に、通路、空間以上の意味がないことを予

め断っておきたい。

註3 方形周溝墓の群構成については長い研究史がある。特に岩松保の群構成モデルは、体系的で良く知られている（岩松 1992a・b）。単位墓、単位墓群とともに、この「ブロック」も用いられているが、ここでは分布状況以上の意味を持たない。これまでの群構成論については機会を改めて論じたい。

註4 我々は規模の大小の違いを、必ず「力の差」に置き換えてしまう。そして、その力はお互いの争いによって手に入れられるもので、大小は「支配→被支配」の関係を現わすもの、闘争の結果獲得される「階層差」と考えてしまう。確かに100m級の古墳と方形周溝墓の被葬者の間に、墓を造る労働力の差からも大きな力の差があるのは明らかである。

そうした力を持つ立場の存在は、階層差として良いのだろうか。ここで用いられる階層の意味、内容は自明なものなのだろうか。現状での「階層」は、自明の用語であるような装いを持っているが、その使い方は、全てをその一言で済ませてしまうような側面が見え隠れする。

迂遠だが、まず、立ち止まって、「階層」の定義とは何かを確かめ、それを用いるために自らの定義を行う必要があるのではないかだろうか。

註5 山岸良二は、弥生時代の方形周溝墓の導入期以来、東日本で広がった四隅切れの意味を、稲作に伴う四角い土地の区画である「水田」の広がりとリンクするもので、「稲作集団」の表徵であるとする（山岸 2007 ほか）。

山岸は、更に出現期の方形周溝墓群である兵庫県尼崎市東武庫遺跡においても様々な平面形があり、一つの群の中でも特定の形のまとまりがないことから、平面形は、何らかの緊密な集團の表示ではないとしている。

山岸の論に従えば、もともと四隅切れの平面形は出自集團のような血縁的な繋がりを示すものではない。では、どうして四隅切れなのか、

- その形がどうして採用され広まったのかが大きな問題となる。同様に、なぜ西日本では当初から全周型が採用され広まったのかも問題である。機会を改めて論じたい。
- 註6 広面9を巡っては、柿沼幹夫が「付帯施設を有する墳墓」として検討している（柿沼2914）。柿沼は、古墳時代に導入されるこの付帯施設を、階層化された新たな葬儀礼を導入した現れとしている。
- 註7 筆者はかつて、低地遺跡の検討を通して、外來集団と在来集団の間で、双方が外婚集団になることにより、擬制的な親族関係が形成されたと考えた（福田2014）。
- 福田2014では、「周溝持建物」や「外來系土器」を例に、外側の社会で、技術を保持しているその製作の担い手そのものである、建物ならば男性、土器ならば女性を技術者として迎え入れ、婚姻によって、技術を導入したと考えた。
- しかし、即物的に、この婚入者を「建物造り」「土器づくり」「墓造り」の技術者そのものと考えるのは無理がある。直接の婚姻関係が必要なのだろうか。
- よく考えると、先方の集団にとって、本当にその技術のエキスパートをムラから出すと、自分たちの生活そのものが危うくなってしまう。
- あくまで「婚姻」は象徴的なものであり、こちらの在来社会の配偶者のステータスに合わせて、先方の配偶者が来ると考えるのが普通であろう。後世のように、それに付随する人間がいるとは思えないが、この「婚姻」は両社会の「象徴的」な社会イベントとして捉えるべきではないだろうか。両者は「姻族」となったのだから、人質でもない限り、両社会の安定的な交流の礎となつたはずである。
- それを前提に考えれば、「玉作り」のような素材と技術を要するような特殊なものでなければ、こちらの在来のムラの各々の技術担当者が、その技術者を招いて伝習する場合や、あちらへ行って研修する場合等があったと考えた方が無理がない。
- 直接、先方の技術者が、固有の技術保持者として指示を出しながら、建物造りや土器作り、墓造りを進めたのであれば、こちら側には裁量がないため、地域的な変容など起こりえる筈がなく、全国的に全く同じものが造られる筈である。土器ならば、大量生産して、先方から運んできてしまえばそれで済んでしまう。
- しかし、これまでにも折に触れ述べてきたように、導入されたもので、先方のオリジナルそのものといったものは存在しない。何らかの形で変容し、あるいは明らかに崩れている。そうであるならば、その工事や製作に当たる者あるいは指示する者は、こちらの在来社会の人間なのである。決まつた技術担当者が存在したのであれば、技術を習得した担当者が行った、あるいは指示して行ったと考えるのが自然だろう。
- そうした建造物や器物は生活必需品ではなく、ある特別な意味を持った「象徴的」なものと考えられる。特別なものだから、手間暇をかけて伝習し、わざわざ必要な折に造るのはないだろうか。
- 例えば、周溝持建物は、明らかな接続溝を持つ東京都北区豊島馬場遺跡や群馬県玉村町上之手八王子遺跡に比べると、とりあえずのようのが多く、実利的で定型的な形式があるとは考え難い。同じ低地に立地する反町遺跡や北島遺跡には、周溝持建物が存在しない。機能のみではない意味があるのかも知れない。
- 更に、その技術の習得から時間を経たり、間接的な伝習が行われるのであれば、一段と崩れは大きくなる。
- それでも、新しい技術を導入した墓や土器にこだわるのは、社会的に葬送などの折なくてはならないものとされていたためだろう。日常的なものでないことも技術が廃れる一因と考えられる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一・福田 聖 2011 「VI 結語」『反町遺跡Ⅱ』 pp.281-310(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
- 石坂俊郎 2008 「中耕・広面遺跡墳墓群と供獻土器(1)」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第2号 pp.1-16 埼玉県立史跡の博物館
- 2009 「中耕・広面遺跡墳墓群と供獻土器(2)」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 pp.57-72 埼玉県立史跡の博物館
- 岩松 保 1992 a 「墓域の中の集団構成(前編)」『京都府埋蔵文化財情報』44 pp.14-20 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 1992 b 「墓域の中の集団構成(後編)」『京都府埋蔵文化財情報』45 pp.1-15 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大庭重信 1999 「方形周溝墓からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』 pp.169-184 大阪大学考古学研究室
- 2005 「方形周溝墓の理葬原理」『考古学ジャーナル 534 方形周溝墓研究の新展開』pp.5-8 ニューサイエンス社
- 柿沼幹夫 2014 「荒川中流域における古墳時代前期前半の付帯施設を有する墳墓」『埼玉考古』第49号 pp.1-36 埼玉考古学会
- 杉崎茂樹 1993 「VI 結語」『中耕遺跡』pp.281-310(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 相山林継・岸井良治(編) 2005 「方形周溝墓研究の今」雄山閣
- 清家 章 2010 「古墳時代の理葬原理と親族構造」大阪大学出版会(電子版)
- 2018 「理葬からみた古墳時代」歴史文化ライブラリー 465 吉川弘文館
- 田中良之 1995 「古墳時代親族構造の研究」柏書房
- 2017 「骨からみた古代日本の親族・儀礼・社会 -もう一人の田中良之II-」すいれん舎
- 福田 聖 1996 「第六章 方形周溝墓の死者儀礼」『関東の方形周溝墓』pp.395-412 同成社
- 2008 「比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成」『研究紀要』第23号 pp.13-46 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2014 「低地遺跡から見た関東地方における古墳時代のはじまり」私家版
- 2012 「古墳時代前期の単位集団-集落編」『埼玉考古』第47号 pp.41-57 埼玉考古学会
- 2015 「関東地方における古墳時代の方形周溝墓」『考古学ジャーナル 674 方形周溝墓発見と研究50周年』 pp.13-16 ニューサイエンス社
- 2021 「方形周溝墓研究におけるキヨウダイ原理をめぐって」『研究紀要』第35号 pp.65-90 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤井 整 2017 「弥生墓制からみた淀川・木津川水系の集団関係」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』pp.27-51 同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集
- 2020 「近畿地方からみた荒尾南遺跡の墓地構造」『荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～』第34回考 古学研究会東海例会資料集
- 山岸良二 1981 「方形周溝墓」ニューサイエンス社
- 1991 「第2節方形周溝墓」『原始・古代日本の墓制』pp.120-146 同成社
- 2009 「周溝墓の始原問題を考える」『考古学と地域文化』pp.123-130 一山典遺歴記念論集刊行会
- 山岸良二(編) 1996 「関東の方形周溝墓」同成社
- 若林邦彦 2004 「第8章 調査のまとめ」『瓜生堂遺跡2』pp.93-94(財)大阪府文化財センター調査報告書第107集

報告書

- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集
大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第 107 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989 『上組遺跡Ⅱ』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 80 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 『広面遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 89 集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『中耕遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 125 集
佐賀県教育委員会 1997 『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第 132 集
佐賀県教育委員会 1997 『吉野ヶ里遺跡平成 2 年度～7 年度の発掘調査の概要』佐賀県文化財調査報告書第 132 集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986 『吉河遺跡・発掘調査概報』福井県埋蔵文化財調査センター所報 2
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2019 『吉河遺跡』

研究紀要 第36号

2022

令和4年3月10日 印刷

令和4年3月17日 発行

発行 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社